

金木犀を

敷き詰めて...

ナオ

序

「何故？何故私と結婚できないの？」久美が聡一郎に詰め寄る。

「ゴメン。僕は誰とも結婚できないんだ」聡一郎がすまなそうにそう答えた。

「前の奥さんの事、愛してるから？」久美が足下に散った金木犀の花を見ながら声を落として言った。

「それだけじゃない」聡一郎が立ち止まって言う。

「どう言うこと？」久美も立ち止まる。

「本当に君には申し訳ないと思っている。だけど、僕は結婚に向いてないんだよ。君の事大切な人だとは思ってる。でも、僕には愛が良く判らないんだ。大切な君を守ることもできないし、大切な人と一緒に暮らして、家庭を作るって言う事が僕には出来ない」

「そんなのやってみなけりゃ判らないでしょう」久美は声を抑えてそう言った。

「確かに、君の言うとおりで。僕は臆病者なんだよ。やってみる前にやめようと思ってしまう」

「前の結婚でそんなに辛い事があったの？奥さんに浮気されて、そんなに傷ついたの？私はそんな事しないわ。私はあなたを傷つけないし」

「ありがとう。でも、そうじゃないんだ。僕が僕を知らな過ぎたからああ言う結果になっただけで、めぐみのせいじゃない。僕がめぐみを傷つけ、その傷で僕が初めて本当の自分に気づいた。それだけのことなんだ」

「やっぱり、前の奥さんの事愛してるのね」久美がため息を付きながら歩き始めた。

聡一郎もその後をゆっくり追う。

「ゴメン。本当に申し訳ない」聡一郎が久美の後ろ姿にそう言った。

久美が振り向いて言う。「もう謝らないで。あなたは随分良くしてくれたわ。私が何も判らなくなっていた時も、ずっと傍にいてくれたし、私の哀しみと怒りをちゃんと受けとめてくれた。それに関してはあなたに感謝してる。でも、私は今のままじゃなくて、もっと幸せになりたいの。だからあなたが私と幸せになろうと思わないんだったら、もう終わりにしましょう」

「君はもう大丈夫なのかい？」聡一郎が久美の顔を見ながら言った。

久美は寂しそうに笑って見せるとそれに答える。

「ええ。私もあなたももっと幸せになるべきだって思うの。だから同じ幸せを見続けられないんだったら、一緒にいるべきじゃない」

「久美・・・」聡一郎は後の言葉が続かなかった。

「私この金木犀の香り、一生忘れないと思う。必ず幸せになろうと思うけど、この匂いがかぐときっと今日のことを思い出すわ。そして、その時にどんなに幸せでも、もっと幸せになろうって思うことにする」

「ありがとう。僕も君と過ごした日々のこと、忘れない」

久美はもう一度笑って見せて言う。

「私はこっちの道を進むから、あなたは今来た道に戻ってくれる？それで終わりにしましょう」

「判った。戻り道ってとても僕らしい道だ。本当にありがとう」聡一郎はそう言って手を差し伸べた。

久美も、その手を取って言った。「さようなら」

「めぐみさん、このお茶美味しいけど、なんだか変わった匂いですね」

南に向いた窓から差し込む午後の日差しを浴びながら、私の淹れたお茶を飲んだ正巳が言った

。

「そうでしょう？金木犀の花が入ってるのよ」

「そんなもの飲めるんですか？」

少し長くなった日差しのせいで、元々明るめの正巳の髪が、透明感を帯びている。

「ええ、大丈夫。中国四千年の歴史だから」

「ああ、ウーロン茶ですか」

薄目の唇を少し横に引いて、軽く笑って見せた。

「中国緑茶に花が入ってるのよ。たまには変わった香りも良いでしょう」

「そうですね」

正巳はそう言ってカップに残ったお茶を飲み干した。

夾竹桃の花を見ながら過ごした夏も過ぎ、気が付くと街に金木犀の香りが漂い始めている。

正巳は忙しそうに各地を飛び回っている。

久しぶりに大阪へ戻ったと思ったら、また何か問題を持ちこんで来たようだ。

「それで、どうしたの？」

「いや、暫くめぐみさんの顔を見てなかったから・・・」私の顔を覗き込むようにして、春樹に良く似た笑顔で正巳がそう言った。

「本当にそれだけなの？」私は彼の涼しげな切れ長の目の奥を覗き込みながら言う。

「いえ・・・。実は・・・」正巳が口ごもる。

それを見て私は笑いを堪えながら言う。「命に関わるような仕事は嫌よ」

「多分、大丈夫だと思うんですが・・・。めぐみさんの仕事、忙しいんですか？」

何故か、いつも仕事が空いた時に正巳はやって来るのだ。

「残念な事に、暇してるわよ」私は笑いを堪えたままそう言った。

「良かった」正巳はほっとしたような笑顔で言う。

私は笑いを堪えきれなくなって吹き出す。「それで、今度は私に何をさせようって言うの」

「いえ、そんなに大きな問題じゃないんですけど、ちょっと気になる事が・・・」

「恋人が出来て、私に紹介してくれるの？」

正巳はそれに笑って見せながら言う。「そうだったら良いんですけど、まだめぐみさんのこと忘れられないから」

「あらっ？忘れたかったんだ」

「ええ。そうですよ。叶わぬ恋なんて三十男には辛いですからね」そう言って大きくため息をついてみせる。

「叶わぬ恋か・・・。それは辛いわねえ」

「めぐみさん、ウイスキーを貰えませんか？」

「まだお日様が出てるのに・・・。仕事は大丈夫なの？」

「今日は日曜日ですよ。世間は休みなんです」

「あら、そうだったかしら？此処で仕事をしてると曜日の感覚が無くなるのよねえ」

「で、お酒飲ませて貰えますか？」正巳が笑いながら言う。

「良いわよ」私はそう返事をしてキッチンへグラスと氷を取りに行く。グラスは正巳が小樽から買って来た、柔らかな手触りの吹きガラスだ。

「どうぞ」私はそう言って彼の前にそのグラスを差し出し、ウイスキーを注ぐ。

「有り難う御座います」正巳はそれに口を付けた。

「それで、どんな問題なの？」私が改めて尋ねる。

正巳は肯きながら口を開いた。

「実は、僕の知り合いなんですけど、その人がちょっとした問題を抱えてるんですよ」

「問題って？」私も自分のグラスにウイスキーを注ぎながら尋ねる。

「それが・・・変なモノに取り憑かれてるみたいで、何をやっても取れないんです」

「憑き物？それだったらあなたの仕事じゃない。私よりずっとあなたの方が詳しいはずよ」

「そうなんですよねえ。それで、今まで僕一人で色々やってみたんですけど・・・」

「ダメだったの？」

「はい」正巳はそう言って私の目の奥を覗き込む。

「春樹を呼ぶ？」

「出来れば御願います。僕だけだと梶さん、あまり答えてくれないんですよ」正巳はすねたような口調で言った。

私はそれに頷いて見せてから春樹に呼びかける。「春樹、ちょっと教えて」

「どうした？」いつものように春樹がなんの抵抗も無く私の口を使って言った。

「何か正巳が悩んでるみたいよ。あなたの見たところではどうなの？」私も随分慣れてきた。

「五十嵐、状況を説明してみろ」正巳に向かって春樹が言った。

「あなた、どんな状況なのか知らないの？」私が春樹に尋ねる。

「いや、知ってるよ。だけど、五十嵐に説明させないと俺が姉さんに説明することになるだろう？それだと何処に問題があるのか本人には判りづらい」

「そうか、説明することで、整理させるのね」

「そんなとこ。五十嵐、出来るだけ姉さんにも判るように説明してみろ」もう一度正巳に向かってそう言った。

「はい」正巳はそう答えてから、グラスのウイスキーで喉をしめらせて話し始めた。

「実は、うちの契約チャネラーの事なんです。とても力のある人なんですけど、その力が閉じたと言うより、変なところに繋がってしまった感じなんです」

「チャネラーって、霊能者って考えた方が良いのかしら？」私が尋ねる。

「あっ、はい。チャネラーみんながそうじゃないですけど、その人は霊能者です。そこからチャネルを覚えた人ですから。それで、その人が今完全に止まってしまってるんです」

「止まってるとって、どう言うこと？」

「そうですねえ、僕が梶さんを降ろせなかった事って在ったじゃないですか。あんな感じで霊的能力が全く無くなって、その上、人としての存在まで危うくなってる」

「良く判らないわねえ。人としての存在が危ういって・・・。その人、生きてるんでしょう？」

「はい」

「普通の生活は送れているの？」

「いいえ、ダメです。五十歳ぐらいの男性なんですけど、娘さんと二人暮らしで、その娘さんが今面倒をみてます」

「面倒をみて貰わないといけないような状態なのね」私が念を押す。

「娘さんから電話を貰ったのが最初だったんです。『父が変だ』って」

「どんな風に変だったの？あなた会いに行ったんでしょう？」

「はい。布団の中でずっと寝たままでした。それで、僕が見たところによると……」

正巳はそこで一度言葉を切り、大きく息を吐いてから続けた。

「その～、大蛇が巻き付いているんです」

「大蛇！」私は驚いて声を上げる。

「はい。もちろん本物の蛇じゃないですよ。霊的なもの……」

「それをあなたは取れなかったって言う事なの？」

「そうなんです。何をやってもダメなんです……」

「春樹、それってどう言うことが説明してよ」私は春樹に向かって言う。

「あれはな、蛇があのお親父に取り憑いてるんじゃないかと、親父が蛇を取り込んでるんだ」

「そうだったんですか」正巳がそう言って肯く。

「それを取るのにはどうすれば良いの？」私が春樹に尋ねる。

「姉さんならどうすれば良いと思う？」

私は暫くグラスを見つめながら考えた。「ねえ、それってもしかして、私と同じ状態なんじゃないの？」

正巳が驚いたように顔を上げた。私が続ける。

「だってそうでしょう？私は春樹に取り憑かれているわけじゃないもの。私が春樹を取り込んでるの。それと龍も……」

正巳が頷く。「そうですね。そう考えれば良いわけだ。でも、めぐみさんの龍は、何時もにこここ笑ってます。だから、めぐみさんと繋がっていてもそんなに変わって思わないで居られたんですよ。でも、あのチャネラーの人は違った。本人が見えないぐらい大きな蛇が巻き付いて……」

「気持ち悪かったんだ」私が言う。

「はい」正巳は正直に肯いて見せた。

「春樹、それであなたならどうするの？」

「俺か？」

「ええ、そうよ。あなたを私から追い出そうとしたらどうすればいいのかしら？」

「姉さん！そんな辛いこと言わないでくれよ」正巳が真剣な顔で答えを待っているのを見て、春樹はからかうようにそう言った。

「梶さん……こんな時にふざけないで下さいよ」正巳が情けない声を出した。

「良いじゃないか、甘えておくのが姉さんと仲良くするコツなんだよ」春樹はそう言って柔らかな感情を私の中に残す。

私が正巳に助け船を出す。「多分、私が春樹を必要としなくなれば、自然に居なくなるって思うわよ」

「めぐみさんが、梶さんや龍を必要としなくなれば良いんですか？だったら、あの人はあんなに苦しい思いをしながらも、大蛇を必要としているんでしょうか？」

「多分ね」

「あの蛇に頼ってるんだよ。だから、お前が幾ら取ろうとしても、あのオヤジが離すもんか」

「でも、本人にはそんな自覚無いですよ。まあ、本人は意識不明で寝込んでるわけだからそれで良いとしても、周りの者には不幸極まりない出来事です」

「それはそうよね。で、その娘さん、可愛いんでしょう？」私が正巳をからかう。

正巳は少し赤くなって正直に肯く。

「なるほど、そう言うわけか。だったら、俺もしっかりとサポートしないとな」春樹が言った。

「うわあ〜っ、恋敵出現」私が言う。

「梶さん、めぐみさん。二人ともふざけないで下さい」正巳がムキになる。

「判った、判った。で、あなたは私に何を聞きに来たの？それをはっきりさせて頂戴。その娘さんとの仲を取り持って欲しいの？それとも、その寝込んでいるチャネラーを何とかしたいの？」

「もちろんチャネラーの方を何とかしたいんですよ」正巳がしっかりした口調で答えた。

「正巳君。何時も言う事をもう一度言うわよ。私達は、基本的に他人に関われない。他人が望むことを変えたり出来ない。覚えているわよね」

「でも、あれは普通の状態じゃない。それに、僕にはそれをどうにか出来る力がある筈なんです・・・」

「そう。それから先を私にちゃんと喋って欲しくないかしら？」私は姿勢を正して、そう言った。

正巳は、目を閉じて暫く考えると、ゆっくりと肯き、口を開いた。

「判りました。僕はあの大蛇を取りたい。それは僕がそうしたいからです。それをすることで、僕が先に進める。だから、チャネラーの為に何かしたいんじゃないんですね。もちろん、その現象で苦しんでいる涼子ちゃんのためでもない」

「ふう〜ん。涼子ちゃんと言うんだ。で、そのおじさんはなんて言う名前なの？」

「あっ、はい。細川さんです。細川正」

「うん、わかった。じゃあ、そこから始めましょう。春樹、それで良いわね」私は春樹にも念を押し。

「ああ。それで良い」春樹がそう言った。

「正巳。その細川さんは、何故その大蛇を必要としているのかしらね？」

「そうですね。そう考えるべきなんです。僕は、大蛇が取り憑いてるって思いこんでたから全然その辺のこと感じてないんですよ」

「ねえ春樹。こういう場合どこから手を着ければいいのかしら？やっぱり前世のリーディング？」

「姉さんもだんだん慣れてきたなあ。それで良いと思うぜ」

「あなたのお陰で随分勉強させていただきましたから。だったら、何処に焦点を当てればいいのかしら？私がその細川さんに会った方が良いの？」

「めぐみさんが読んでくれるんですか？」正巳が言う。

「チャネラーを素人の私がリーディングするって言うのも変な話ねえ・・・」

「でも、姉さんなら読めるだろう。別に、会う必要はない。どうせそんなもの見ても気持ち悪いだけだ。姉さん昔から爬虫類は苦手だっただろう。おもちゃの蛇でもギャアギャア言ってたじゃないか」

「良く覚えてるわねえ。でも、それ、どう言うこと？」

「五十嵐を通じて読めるさ。五十嵐は現物を見てきてるからな。五十嵐、その大蛇を見てきた時の事を思いだしてみろ」春樹が正巳に向かってそう言った。

「はい」正巳はそう答えて、静かに目を閉じる。

私の中に薄紫色の靄が広がってきた。それが徐々に形を持ち始める。

「うわっ！」私が声を上げる。そしてつい「気持ち悪〜い」と言ってしまった。

「ほら、やっぱり」春樹が笑いながら言った。

白蛇だ。それも太さが人の胴体ほど在って、横たわる男性にしっかりと三重に巻き付いている。顔は・・・、目が潰れているようだ。人の頭より大きな頭をその男性の胸の上に乗せている。

「正巳、もう良いわ。私それ、苦手よ」私は気持ち悪さに耐えかねてそう言った。

「どうでした？見えましたか？」正巳が心配そうに言う。

私が見たままを告げると、「そうです。その通りです」正巳が感心したように言った。

「春樹、私にはあの蛇、女性だと思えるわ。彼の胸でとても安心してみたいだから」

「そうだな。俺もそう思うよ」

「でも、何故目が見えないのかしら？」

「それを知りたかったら、その白蛇に意識を合わせてみな」

私はそれをうけて、もう一度その白蛇を頭の中で再現する。二度目に見るそれは、慣れもあってか初めての時程気持ち悪くなかった。

私は心の中で尋ねる。『ねえ、どうしたの？目が見えないの？』

その蛇は驚いたように頭をもたげて、私の方に顔を向けた。もちろん、それは私のイメージの中での出来事だ。

『大丈夫よ。別に悪さしたりしないから』私はもう一度その白蛇に話しかける。

白蛇は、ピンク色の舌をちょろちょろと口の真ん中辺りから出す。私にはその蛇の声が聞こえた。聞こえたと言っても音として聞いたわけではないが、確かにその思いがその白蛇のものだと言うのが判る。

『目が見えないの。だから、この人と何時も一緒に居る』

『どうして目が見えなくなったの？』私が尋ねる。

『人を呪った。愛しくて愛しくてたまらない人を。どうしても私を受け入れてくれないから・・・』

私にはその白蛇に、長い黒髪が印象的な淡い萌葱色の重ねを着た平安美人が重なって見えた。

『呪いのせいで目が見えなくなったの？』

『私は釘を打ったのです。神の木に。毎日毎日何本も何本も・・・。神の木を傷つけると罰が当たる・・・』

『ねえ、あなたが呪った人はどうなったの？』

『私の呪いのために・・・』彼女はその後を続けることが出来なかった。

『あなた何時からその姿をしてるの？』私は改めて尋ねる。

『その姿って？』彼女は自分の姿に気づいていないようだ。

『ねえ、あなた白蛇なのよ』私は思いきってそう言った。

『まさか？私は人です。確かに鬼のような心を持ってしまったけど・・・』

『ねえ、あなたが生きてた頃の都って何処？』それが分かれば彼女の生きた時代が分かるかも知れないと思った。

『都は都でしょう』

『だったら何処で呪いの釘を打ったの？』

『貴船』

やはり平安時代だ。

『そう、京の都人だったのね。それで何故その人に憑いてるの？』

『この人が私の目の代わりをしてくれるって言ったから。それに、この人はあの方に良く似てら

っしやる』

『見えないのに判るの？』

『声が……。それに、このお方は真っ暗な中を彷徨っていた私に優しく声をかけて下さったのです』

『そのあなたが好きだった人は死んだんでしょう？それもあなたが呪い殺して……。』

彼女の言わなかったことを確認する。

『私も確かに死んだ……。』

彼女はやはり相手の死を口にはしたくない様だ。それで自分の死を口にするによってそれを肯定して見せた。

『ねえ、あなたが死んだ時の事、思い出してみてくださいない？』

『二十一日間貴船に通って、そのまま息絶えた……。』

丑の刻参りだろう。

『それじゃあ、相手にあなたの呪いが届いたかどうか判らないじゃないの』

『私があの人首を絞めたのです。息絶えたあと、すぐに身体から抜け出して、そのままあの人寝所へ向かい、そこで私が首を……。』

彼女はそう言って嗚咽を漏らす。

『その時あなたは人だった？』

『私には何も判らない。ただあの人事だけしか思っていなかったから』

彼女は彼女の作り出した現実からも目を逸らせ居てた。

『手で絞め殺したの？』

私は非情にも問い続ける。

『……。覚えてない……。』

長い黒髪を波打たせるようにして彼女は首を左右に振る。

『ねえ、そんなに好きな人を絞め殺してその感触を覚えてないはず無いんじゃないの？』

『……。』

彼女の動きが止まった。

『あなた、巻き付いて殺したんでしょう？』

私は出来るだけ優しい感情とともにそう彼女に言った。本当に愛おしかったのだ。いじらしくて堪らなかった。

『……。』

彼女はそのまま真っ白な両手で顔を覆い、大きく頷く。そして、彼女と重なった白蛇も爛れた目から涙を流した。

『ほら、もう大丈夫よ。しっかり泣きなさい。哀しかったわねえ。辛かったわねえ。でも、もう終わったの。あなたは千年もの間ずっと苦しみ続けたのよ。だから、もう良いの』

私は、そう言いながら愛おしい白蛇の頭をそっと撫で続けた。

「めぐみさん！大丈夫ですか？」正巳が、目を閉じたまま泣きじゃくる私を揺さぶる。

「めぐみ……。私はめぐみ」私は朦朧とした意識で自分の名前を言う。

「そうですよ。あなたは伊藤めぐみ」正巳がそう言って自分のハンカチで私の顔を拭う。

「可愛そうな白蛇さん……。あなた、今の読めた？」正巳に尋ねる。

「いいえ、あまりにも早すぎて付いていけなかったんです。めぐみさんちょっとバージョンアップしたんじゃないですか？」

「あなたねえ……。まあ良いか。あの白蛇さん、好きな男を呪い殺したんですって。それも京都が都だった頃ですって」

「そんなに長く崇ってるんですか！」正巳が驚いたように言う。

「多分、彼女、崇ってるわけじゃないと思うわよ。目が見えないから、自分が蛇になったって事も知らなかったし、ただ、好きだった人と良く似た声の人に目の代わりになってやるって言われて憑いてるだけ」

「でも、確かに霊障が出てるんですよ。ずっと意識不明で寝たまま、たまにふらふらと起き出してお酒を飲むんです。そして、娘さんに暴力を振るって、そのまままた寝てしまう」

「でも、彼女はそんな事してないと思うな。もちろん、意識的につて言う意味でだけど」

「それはなあ、ちょっとややこしい現象かも知れないぞ」春樹が言った。

「どうややこしいの？」私が尋ねる。

「多分、細川のオヤジ、鞍馬で修行してたときにその自分の残存記憶を拾ってきたんだろう。若い頃鞍馬での修行中に白蛇を感じて、それを祀ってるって聞いたことがある。それから自分の霊能力が強くなったって本人が言ってたから」

「やっぱり鞍馬か。彼女は貴船で丑の刻参りをしたみたいよ。でもそれって、やっぱり取り憑いてるって言う事なの？」

「いや、多分だけど、その白蛇、その呪術をやって死んだ女の魂だな、それが細川のオヤジなんだよ。自分の残存記憶を其処で回収した。それで、閉じていた霊能力がはじけたって言う事じゃないのか？」

「私が一言主を取り込んだみたいに？」

「そんなとこだ。でも、細川のオヤジはそれを認めていない。そして、その時の罪の意識を持ち続けているんだ」

「それはやっかいな話ねえ。それってもしかして、捨てるために持ってきたって言うパターンなのかしら？」

「ああ、多分な」

「捨てるために持って来るってどう言うことなんですか？」正巳が尋ねる。

「要するに、自分の罪を自分で許さないと先に進めないのよ。だから、その罪の意識をわざわざ持ってきて、それを捨てる、つまりその罪を自分で許すために生まれてくることがあるらしいの」

「自分を自分で許す……。だったら、その呪われて死んだ人は、呪った人を許さないで良いんですか？」

「龍に教えて貰ったんだけど、肉体を捨てた魂には、恨みも憎しみも無いんだって。在るのは愛の感情だけなんだって。そうよねえ、其処の死んだ人」

「んっ？俺のことか？」春樹がそれに答えた。

「そうそう、あなたよ。恨みや憎しみってまだ持ってる？」

「いやあ、そんなもの見あたらないぜ。俺の場合特殊だから、一応嫉妬心って言うのだけは意識して持っているようにしてるがな。それも、気を抜くとすぐに何処かへ消えちまう」

「そんなものなんですか……」正巳が感心したように言う。

「そんなものらしいわよ」私が笑いながら言う。

「あなた説明して」私が春樹に言う。

「霊障ってなあ……。ほとんどが場所やものに焼き付けられた残存記憶。だから、それ自体が別のものとして存在しているわけじゃないってことさ。結局本人に必要なのない現象は起こらないん

だよ。それは判るか？」正巳に向かってそう尋ねた。

「必要のないものは無いって良く聞きますね。でも、そんなに簡単に全てを受け入れてしまって良いものなのでしょうか？」正巳はいかにも不満そうに言う。

「例えば？」私は正巳に先を続けるように言う。

「例えば、細川さんみたいに、普通の生活すら出来なくなってしまうったり、地縛霊に取り憑かれて事故にあったり、死んでしまうことだって在る。それに、霊現象だけじゃなくっても、通り魔殺人とかも現実にはあるわけですし・・・それをそのまま受け入れるなんてなんだかとても理不尽です」

「私、それについて龍に尋ねたことがあるわ」

「どんな風に龍は答えたんですか？」

「簡単に言ってしまうえば、個人の自由。全ての魂が自分のしたいことを出来るようにプログラミングされているって言う答えだった」

「そんなの僕には納得できませんよ。個人の自由で僕自身の命や、愛する人の命を取られてしまうなんて絶対に納得できません」

「納得できないあなたに、もし、その現象が起こってしまったらあなたはどうする？」

正巳は、「それは・・・」と言ってから、暫く黙り込んで考える。そして、強い意志を秘めた目を上げて私に言った。

「僕は、復讐します。僕にはそれが出来る。それだけの力を持っているんです。絶対に泣き寝入りなんてしないし、相手を警察に渡したりもしない・・・」

私はそれに頷いて見せてから問う。

「あなた、春樹を愛していたわよねえ。でも、春樹の乗った飛行機を落としてしまった飛行機会社に憎しみを持ってる？」

「いえ、それは・・・。それは故意に梶さんを殺そうとしたわけじゃないから・・・」

「色んなミスが重なって、結果的に春樹を含む数百人の人が命を落とした。あの時は操縦していた人も死んでしまったんだけど、もし、その機長が生きていたらどうなったでしょうね。あなたの怒りと憎しみはその一番の責任者でありながら生き残った機長に向かったかしら？」

「それはどうでしょうね。でも、梶さんは、僕を守ってくれる人だったから・・・。僕が守らないといけない人を理不尽に傷つけられたのとはちょっと違うかも知れない。だって梶さんが自分で望んでその落ちる飛行機に乗っていたのに、僕がとやかく言う筋ではないと思うから・・・」

「で、少し判った？」

「えっ？何がですか？」

私は正巳に笑って見せる。正巳はきょとんとした顔で私の顔を見つめる。そして一瞬にして表情を変えると言った。

「そうですか・・・。誰もが自分の撰んだ生を生きているって言うことですね・・・」

「そう言う事ね。龍もそれを言ったの。もちろん私だってそれを簡単に認めた訳じゃないけどね。でも、誰もが全てを知っているって言う前提でものを考えてみるのも一つのやり方よ。春樹だけが知っていた訳じゃないの。みんな全てを自分で決めて生まれてきてるのよ。そして、それを命在るうちに思い出すかそうで無いかの選択をしたのも自分自身」

「でも・・・」正巳はまだ納得していない。

「でも、何？本人が苦しんでいるのがあなたには納得できないの？」

「そうです。そうだ、梶さんはちゃんと理解していた。それで乗るか乗らないかの選択をして、結果的に乗ってしまったんです。だけど、霊障で悩んでいる人達は、そうじゃない。自分で選択

の余地無く苦しんでるんだ」

「本当に選択していないのかしら？」私が問いかける。

「誰が好きこのんで霊に取り憑かれたりするものですか」

「さっきの白蛇は、『目になってやるから一緒においで』って言われたらしいわよ」

「それは、細川さんが特別なんですよ。あの人は、自分のために白蛇を利用したんだ」

「あなたの中での特別って、沢山あるのね。春樹も特別、私も特別、細川って言う人も特別で、あなた自身も特別……」

「誰もが特別って言う事なんですか？」

「あなたの定義だとね」私は笑って見せる。

「五十嵐……俺は、飛行機に乗るの恐かったぜ。だから、この前お前に肉体を作ってもらった時、一気に死んだ時の恐怖がフラッシュバックしたんだ。あの時の俺は、そろそろ終わりだと言うことは知っていたけど、それをヴィジョンとして持っていたわけじゃない。いや、持っていたことは持っていたんだが、俺はそれを見ないようにしていた。俺だって、姉さんと肉体を持ったままもっと楽しみたかったし、お前が自分の力で人を愛するようになるのだから、肉眼で見ていたかった。もっともっと一緒に喜んだり悲しんだりしたかったぜ。だけど、俺の仕事はあそこまでだったんだ。あの先の設定がされていなかったと言うべきだろうか。だから、あそこで肉体を失った。欲なんて言うものなら俺は誰よりも沢山持ってたぜ。それは生きていくために必要なものだからな。俺だって、普通の男だったんだ。それだけは覚えておいてくれないか。お前を抱くのも、姉さんを抱くのも楽しかった。色んな女に好きだと言ったり言われたりしながら生きているのも、色んな問題をクリアしながら仕事をしていくのも、全て生きているということだったんだ」

「生きている……」正巳が春樹の言葉を繰り返した。

「そうよ。私もあなたも生きている。そして、その細川さんも涼子ちゃんもね。生きているって、沢山の現象を経験出来て、それに付随する感情を楽しめるって言う事なのよ。さっき春樹が言ったでしょう、もう恨みも憎しみも無いって。それが、彼が死んでしまったって言う事なのよ。あなたが大切な人を奪われて、憎しみを持って復讐を誓うのも生きているって言う事。それ、とても素敵だと思うわよ。でもね、龍に言わせると、復讐も一つの選択肢でしかないの。其処で復讐を誓ってその為に生きるのもあなたの生き方。その中で幸せを見つけようとするれば見つけられる。もしその復讐を諦めて、忘れるという方法を取ったとしても、やっぱり其処に幸せを見つかる事は出来る。龍はそう言ったわ」

「そんなの敗者の幸せじゃないですか。僕はそんなの嫌ですよ」

「だったら、正巳にもし妻や子供が居たとするわね。それであなたが復讐をして犯罪者になってしまったら、その家族の不幸はどうするの？家族の幸せを守るために復讐を諦めて忘れるという方法で生きた人は敗者なの？」

「それは……。でも、僕にはそんなもの居ないから良く判りません」

「判らないんじゃないくて、判りたくないのね。まあ、今はそれで良いけど、みんな精一杯自分の人生を生きているの。敗者には敗者なりの幸せがあって、勝者には勝者なりの哀しみもあるって言う事だけは認めてくれないかしら？私はさっきの白蛇も、それを必要とした細川さんも否定するつもりはないわ。もちろん、それで被害を被っている涼子ちゃんは可愛そうだと思うけど、その為に涼子ちゃんはあなたと繋がったわけでしょう？それに意味を見つければ、そんなに不幸な事じゃないような気がする」

「だったら、僕はどうすれば良いんでしょう？あの白蛇を落とさないと、細川さんはずっとあの

ままなんですよ」

「そうかしら？多分、状況は変化していると思うわよ。だって、さっきあの白蛇さん心の底から泣いてたもの……。きっと自分が蛇だって言う事に気づいたと思うわ」

「そんなに簡単なものなんですか？」正巳は呆れたように言い放つ。

「判らない……。だって私はあなたみたいなプロじゃないもの。でもね、四国で春樹が言ったの、『悪霊は本気で泣いたら悪霊じゃなくなる』って。あなたがどんな方法でそれを取ろうとしたのかは知らないけど、私は彼女、あの白蛇さんに話を聞いただけ。そうしたら彼女は泣き出したのよ」

「泣けば悪霊じゃなくなる……」正巳が私の言葉を繰り返す。

「そうさ。本気で泣くって言う事は、自分を許すって言う事なんだ。そして、自分を許せば悪霊は悪霊で居られなくなる。多分、そこから先はあのオヤジが片づけないといけないんだと思うぜ。自分の罪を自分で許す。それが現世の罪であっても前世の罪であっても同じ。そして、さっき言った事を補足すると、肉体を持っていた時の罪は、肉体を持っている時にしか許せない。何故なら肉体を持っていない時には罪の意識自体が存在しないからだ。だから、それを捨てるために持って生まれることがあるんだよ。あのオヤジはこれから、神の木に釘を打って人を呪った事と、それで蛇と化してしまった事。それと、その白蛇を使って自分の力を強めようとしてしまったことに対する許しを行う必要があるんだよ」

「そんな大変なこと、細川さんに出来るんでしょうか？」

「そんな大変なこと？」春樹が聞き返す。

「そうですよ。あのおじさんが自分の罪を反省してそれを許すなんて……」

「正巳、そんなに大変な事じゃないわよ。だって私、あなたに許して貰った事でとても気が楽になったのよ。そして、あなたは私を許すって言ったことで、自分自身の重さも捨ててしまえたじゃない」

「母だっためぐみさんを許すと言ったことで、僕が僕を許したんですか？」正巳が驚いて言う。

「そうよ。許してその程度のことの良いのよ。だから、その細川さんがその白蛇さんの罪を許せば、それが自分自身の許しに繋がるの。だって、彼が彼女だったんですもの。判る？それが自分自身の残存記憶を昔鞍馬で回収したって言うことの本当の意味なのよ」

「五十嵐。霊障と言うのはな、いや、霊的なものだけじゃなく全ての現象は、必要があって起きているんだ。だから、必要のない者の前には現れない。偶然霊に取り憑かれてしまったと思えるようなことでも、それにはちゃんと意味が在るんだ。それを見つけ、そのことを一つずつ考え学ぶことが、お前の仕事なんだよ。沢山の術を使って、悪霊をやっつけたり、成仏させることがお前の持っている力の意味するところじゃない」

「悪霊をやっつけたり、成仏させたりする事じゃない……」正巳が静かにその言葉を繰り返した。

私はそんな正巳の横顔を見ながら微笑む。そうすることで、心の中に暖かなものが満ちてきた。

正巳が顔を上げて言う。「僕の持っている力で、いったい何をすれば良いんですか？梶さん、教えて下さい。僕は、いったい何のために生まれてきて、何のためにあんなに辛い修行をしたんでしょう？そして、この力はいったい何のためにあるんだ！」正巳は自分の手をしっかりと握りしめると、私の方へ突き出した。

春樹は暖かい感情を私に送り込むだけで、それに答えようとはしなかった。

「正巳、それよ。それを私も考え続けているの。私にはあなたの持っているような力もなければ、あなたのような辛く淋しい経験もない。でもね、やっぱり私も同じ事を考えているのよ。そして、同じように悩んでる。多分、その細川さんも同じ。あなたの言う特別じゃない人達も同じなのよ。誰もがそれを探すために生まれてきて、色んな経験を引き寄せながら生きているの。春樹が言ってたけど、誰もが同じだけの情報量を持って生まれてるんだって」

「同じだけ？」正巳が尋ねる。

「そうだ、前に姉さんの記憶を探った時に、俺も驚いたんだ。何にも知らないで生きてるような奴でも、同じだけの情報を持っている。持って生まれているというのはちょっと違うかも知れないが、誰もがそれを使える状態にあるんだから、持っていると言って良いと思う。それで、必要な物だけ取り出して使っているんだ。前世というものもそうなんだぜ。お前が思い出したものだけでもなく、俺が読み取った物だけでもない。記憶と言う物はそのお前の魂の中に有る訳じゃないんだ」春樹がそう言った。

「良く判りません」正巳が言う。

「良いか、記憶というものはな、そのお前の個に別れた魂の中に有るんじゃないんだ。全てが同じもの。一つの大きな魂があって、その魂の中に全てが残されている。そうだなあ、とてつもなく大きなマザーコンピューターをイメージしてみてくれ。そのマザーコンピューターに一人ずつの記憶がフォルダという形で入ってる。それで、一人の人が一つのフォルダを受け持っているんだ。そして、その人生での色んな出来事や感情がファイルという形で分類されて残されている。それを人はチョイスして持ち出すんだ」

「ちょっと待って下さいよ。だったら、僕がめぐみさんに言われて思い出した前世というものは僕のものじゃなかったんですか？」

「当たり前だろう？お前は五十嵐正巳という人間じゃないか。オウスでもなければ鬼でもない」

「でも・・・」正巳は納得しかねる顔で言った。

私にもその考え方は初めてのものだ。いや、初めてと言うよりも薄々感づいては居たが、言葉にすることが出来ないで居た真理だ。

「ねえ、春樹。龍が何時も言う『全ては同じものの、違う側面でしかない』って言うのはそのことなのね？」

「ああ、そうさ」

「すみません。もう少し説明して貰えませんか？僕には難しすぎるんです」正巳が言った。

「判った。まず、一番大切なのはお前が五十嵐正巳という人として其処に存在していると言うことだ。だから、名前というものが呪術として使える。つまりさっき言ったマザーコンピューターの中に残されるフォルダに『五十嵐正巳』と書いてあると思ってくれ。その名前が合い言葉のようなものだ。つまり、コンピューターで言うファイル名と拡張子。そして、そのお前のフォルダに色んなファイルが入っている。つまり、子供の頃の境遇であったり、その時に感じた心の動きなんかだ。だいたい、出来事というか、現象というものは感情のおまけとして入っているようなもので、あくまでも感情が主体になっているんだがな。深い悲しみがあつたら、それが何によってもたらされたかが端書きみたいな感じで入ってる。つまり、現象とは心の動きを観察するための起爆剤でしかないんだ」

「現象ではなく感情が主体なんですか？」正巳が尋ねる。

「そうだ。人として別れて見える状態で生まれる一番の目的が、感情を手に入れるということだから」

「人としての感情・・・」正巳は繰り返しながら、もぞもぞと動くと、ちゃんと正座した。

「死というものは、肉体を失うだけの事なんだ。それがどう言うことか判るか？」

「肉体を失うと言う事は・・・。個でなくなると言うことですか？」

「そうだ」春樹は静かに頷く。

「個でないと言うことは、自他の別が無い状態。全てが集合された状態。それが師匠の言うマザーコンピューター・・・」正巳は自然に春樹を師匠と呼んだ。

「そうさ。だから、誰もがそこから必要な情報を持ち出せる。要するに、仏教用語で言う因縁だ。コンピューターに例えればソフトのチョイス。それを幾つも組み合わせ、五十嵐正巳という人生の粗筋を作って出て来るんだ。そこまでは判るか？」

「はい。人が生まれる時に、因縁を仕組むって言う事ですね」

「そうだ。でも、それだけじゃないぞ。人として生まれることによって個に別れるが、魂は繋がったままだ。ただ、肉体のない時程それが密接ではないから、気づかないがな」

「師匠。其処の所が良く判りません」

「良いか、例えば俺やお前が持っている力。それは、必要があって持っている。そこまでは納得するか？」

「はい」正巳が答える。

「俺やお前が持っている力とは、大いなる魂、つまりマザーコンピューターから情報を引き出す力だ。要するに、呼び出しコマンドを他の人より沢山知っていると言う事だな」

「はい。それは何となく判ります」

「ならば何故それを知っているのか。それは、お前自身が最初にそれを必要とする人生を設定したからだ。しかし、それが当面必要ない人生を選んだ者もいる。つまり、金儲けだとか、政治だとか、教育だとか、芸術的なものを追求しようとして生まれる個に別れた魂達だ。個に別れて生まれることには色んな目的があるんだよ。それでその人達なりのソフトが初期インストールされているんだ。物質的世界を極める為には、精神的な物に関わらない方が絶対に有利だからな。

でも、物質的世界を極めると、精神的な物を求めるようになってしまう。物質には限界がある。その限界が見えた時点で、限界のない精神の世界へ意識が向くんだ。だから大体において、成功者と言われる者は、最後には自分の神を見つけだしている。それは、その時、つまり必要な時期に精神的な世界を思い出すようにインプットされていて、その時期が来ると大いなる魂からダウンロードして来るからだ。ここで言いたいのは、限りある肉体を持った者は、当初の目的にとって不必要なものはインストールしたりしないってことだな」

「容量の問題ですね」

「そうだ。しかし、それが必要な時になれば、其処でもう一度必要なソフトをダウンロードできる。その為にも、魂を切り離してしまう訳には行かない。時限装置みたいに、必要な時にそれが目覚めて、大いなる魂と繋がる。そして、それからの人生に必要な知識をそこから持ち出すことが出来るんだ。しかし、それが一つの生とは限らないがな。まあ、一つの生でそれをしたのが姉さんさ。姉さんは、元々その力を持っていたわけではない。しかし、俺と出会い、その時期が来ることによって、新しい力をダウンロードした。と言うよりも、姉さんの場合再インストールしたと思った方が良いかな」

春樹の使うコンピューター用語は、私にはちんぷんかんぷんだったが、意味はちゃんと判った。

「ねえ、春樹。それって一度死にかけた人が、突然何かに目覚めて人が変わったりするのと同じ事なの？」

「ああ、そうだよ。それとか、悟りを開くって言う事も同じ様なものだ」春樹が答えた。

「でも、私、悟りを開いた記憶なんて無い」

「でも、死にかけたことなら何度もあるじゃないか。その度に姉さんは、大切なことを思い出している。まあ、そんなに大げさなことでもなくて、ちょっとした気づきでそれが起こることもある。だけど姉さんが再インストールしたのは、哀しみの中で自分を捨てた時だ。ほら、俺が死んだ時。それで、俺の持っていた力をその隙間に押し込むことが出来た。それも姉さんが、それまでにそれなりの準備を終わらせてくれていたから出来ただけだな」

「あの、病院で？」

「ああ、あの時姉さんは心が体から離れていただろう？それで、上手く行ったんだよ」

「ねえ、もしかしたら、あなた、その為に死んだんじゃないでしょうねえ・・・」

「まさか。俺は俺のしたいことをしただけさ。それに俺と姉さんがそれを生まれる前に決めてあったから出来たんだ。最後の最後で、全てが繋がって、何もかもが上手く行った。そんな感じかな。最高に気持ちよかったぜ」

「師匠。それで、普通の人もそんな事が出来るんですか？」正巳が尋ねる。

「俺も姉さんも普通の人だったぜ。要するに、人生というのは、初めに必要な物を全部その肉体に備えてくるわけじゃないって事。肉体というものは有限だからな。ただ、その有限の肉体に無限のものを備えるための機能は持っている。だから全てを持って居ると言える。それが必要な時にはちゃんとそれに繋がって、内から出て来るんだからな。必要のない時には無限の容量を持つマザーコンピューターが管理しているだけさ」

「マザーコンピューターは、何故個に別れようとしたんでしょう？」

「それは俺にも良く判らない。しかし、個に別れることによってもたらされるものとは、感情以外に無いんだ。だから、俺はそれが目的ではないかと推測している」

「感情ですか・・・。だったら愛は、その大いなる魂に愛はあるんですか？」

「愛そのものだ」春樹はいとも簡単にそう答えた。

「愛とはいったい何なんです？」正巳がたたみかけるように尋ねる。

「そのままのお前が、愛だ」春樹も即座に答えた。

「師匠・・・」正巳は混乱した。

「良いか、お前が愛そのものなんだ。つまり、魂の世界には愛しかない。そして、その魂がお前なんだ。だから、お前が愛以外のものであるはずがないだろう」

「でも、僕には判りません。人を憎んだり、傷つけたり、陥れようとしたり、そんな僕が何故愛なんですか？」

「愛というものは、お前が作ればいい。お前のための愛をな。人を愛する前に、自分を深く愛する。そして、自分の好きな自分で他人を愛すれば良い。自分を愛せないなら、他人をも愛せないだろう。しかし、そんな自分でも愛以外のものではないんだ。残念なことに、それ以外のものになり得ないと言った方が良いかな？」

「春樹。それは難しすぎるわ。あなたはもう肉体を持っていないから、それを知っていても支障はないけど、肉体のあるものにはもっと現実的な指針が必要なのよ」私が横から口を挟む。

「そうだな。確かにそれは正しい。しかし、真理は曲げられないんだ。真理とは一つのもの。つまり、愛が真理なんだ」

「判った。でも、今の状況に即した助言は無いの？」

「ああ、それなら、さっきも言ったように自分の好きな自分に成れと言う事だろう。自分を愛するための一番の近道だ」

「そうねえ。それが一番かもね。そうすれば、誰とも比べなくても自分を見つけることも出来るし、誰を頼らなくても自分で歩いていける……。でも、少し寂しいわねえ」

「他人を愛することを、好きな自分に組み込めばいい。誰かを愛している自分が、理想の形であればそれで良いじゃないか」

「だったら、その誰かを愛する『愛』ってどんなものなんですか？僕の愛し方と、師匠の愛し方は天と地ほど違う」正巳が言った。

「そうだろうか、俺が姉さんを愛したのと、お前が姉さんを愛しているのは、そんなに違うだろうか？」

「いいえ、同じよ。確かにアプローチの仕方は違うけど、満たされるのは同じ。どちらの愛も私には心地良い……」私が正巳に言う。

「でも……」正巳はまだ納得できずに口ごもる。

「あのね、確かに今春樹が言った愛は高尚すぎるから判りづらいけど、人と人の間の愛なら、そんなに難しくはないわ。あなたに愛されているのも、春樹に愛されているのも、どちらも心地良いのよ。そして、その心地良さは、私の中に新しい愛を作り出してくれる。もちろん、どちらも結婚を望んだり、相手を束縛することを望むような愛ではないから、普通の人とはちょっと違うかも知れないけど……。今のあなたは多分、相手を自分のものにしたくなるような愛だとか、一緒に家庭を作って、共に老いていくような愛を求めているんじゃないのかな？」

正巳はそれに対して何も言わなかった。私は続ける。

「それも確かに一つの愛よ。でも、春樹もあなたも私にそれを求めなかったから……」

「いいえ、僕は何時もそれを求めていたんです。なのにめぐみさんは何時もそれを茶化して受け流していただけで……」

「そうかしら？もしそうだったら申し訳ないことをしたわね。でも、私、あなたと未来を作ろうなんて思わない。だって私、誰にも関われないって知ってしまったんですもの。だからと言って、ずっと一人で居るって決めた訳じゃないけどね。私の人生に必要な人と、必要な期間だけ一緒に暮らす。そして、その必要な人を愛することができれば、素敵だと思う。それが前の結婚で得た教訓よ」

「めぐみさんにとっての愛って何なんですか？」

「それが判らないから、山にでも籠もろうかって思ってたんじゃないの。でも、さっきの話で何となく判ってきたわよ。要するに、魂というのは愛以外の何ものでもないって言う事らしいから……。例え、心が壊れていて、回りの者を思いやることの出来ない人でも、やっぱり愛で出来ている。極悪非道の犯罪者もね。それを認めないといけないんだわ」

「めぐみさん。僕はそれ、絶対許せない」

私は、そんな正巳に微笑みかけて言う。

「正巳君、許す必要なんて何処にもないのよ。あなたが言うように恨んで、憎んで、復讐をすれば良いの。そのあなたの思いも愛なのよ。愛という言葉は狭く解釈しすぎないの。許すことが愛だとか、信じたりすることが愛なんて、そんなに小さな括りで愛を受け取らないで。愛って言うのは、全てのことを知っていながら、尚かつ感情を学ぼうとするような、貪欲で、非情なものなのよ。要するに、さっき春樹が言った愛イコール神と考えて良いと思うわよ。そうでしょう？」

春樹」私は春樹に問いかけた。

「姉さん。やっぱり姉さんも思い出したんだなあ」春樹が言う。

「あなたの言ったマザーコンピューターって、要するに全てのものを生み出し、創造と破壊を繰り返すものって言う事でしょう。だって、何もかもを知っていて、それを管理していると言うこ

とは、それが全ての幻の元って言うことですもの。それは神でしかないわ。そして、それをあなたが『愛』と表現した限り、愛イコール神って言うことでしょう」

「まあな。でも、神という言葉を使うと、イメージが固定されてしまうだろう。今までの話でも分かるように、『愛』と表現すると、個人的にも解釈できるし、全体的に解釈することも可能だ。それが『神』に成ってしまうと、もっと限定されてしまう。その上、その『神』に名前が付いてしまったら、聖戦なんて大義名分で殺し合うようなことになってしまうからな。今の俺にとって、それを『愛』と呼ぶことは、一番ふさわしいと思えるんだ。何故なら、人と人の間にも存在し、ものとももの間にも存在する。そして、それは時を越えて続くし、何もかも元になるものだから」

「確かに、それは正しいかも知れない。でもね、今から恋をしようとしているあなたの弟子には無理があると思うわよ。だって、この子、まだ女さえまともに愛したことがないのよ。そんな子供に全てを包み込む愛の話をしたところで、どうしようもないって思わなかったの？」

「めぐみさん！それは酷すぎます。僕はもう子供じゃないし、ちゃんとめぐみさんのことを愛してもいる。確かに、梶さんとめぐみさんの様に、深く愛し合っていないかも知れないけど、僕はめぐみさんを幸せにしたいって心から思っているんですから」

「どうもありがとう。でも、私は誰にも幸せにして貰ったりしない。私は私が幸せになれる人と一緒にいたいだけよ。私は、あなたが幸せになるのを見ているのが大好きなの。それを見るのが私の幸せでもある。だからと言って、あなたに幸せにして貰いたいんじゃないの。判る？」

「判りません」正巳が首を振る。

「あなたはあの白蛇と同じ事を今言ってるのよ。あの女の方は、自分の想いが強すぎて、自分を愛してくれない男性を呪い殺したの。彼女は、何故自分を愛して貰う必要があったと思う？それはね、自分の存在を自分で許せなかったからなのよ。これほど好きなのに何故愛して貰えないのかって……。それが妄執となって残ってしまった。その人と一緒になれば、幸せにして貰えるって思っていたの。でも、その相手の幸せは別の所にあった。それが許せなくて、相手を呪い殺し、自分が自分であることすらやめてしまった。本人は気づいていなかったけれど、その強い思いは自分の姿すら変えてしまった。悲しい話よねえ。でもね、彼女には彼女なりの愛があったのよ。そして、その愛が神だった。だからこそ、その愛が神と同じ力を発揮した……。彼女が死を選んだのも、蛇に変化してまで相手を殺したのも、全て愛のなせるわざ……」

「僕は、そんな愛、要らない。僕がめぐみさんの幸せを望むことが、何故そんな相手を呪い殺してしまった女と同じなんですか？」

「何も、何処も違わないと思うわよ。死んだ春樹を飲み込んでしまう愛も、生きている愛人を殺してしまうのも、結局同じ事……。悲しいけどね」

「めぐみさんは、それ程……」

「春樹を愛しているのかって？」

「ええ」

「判らないわ。だって私、愛を良く知らないんだもの。だから、こうやって、沢山の色々な出来事と呼び寄せては、勉強しているのよ。でも、あなたに愛されていることは、とても心地良いし、たまに、その中で安住したいなって思ったりもするわ」

「何故、そんなに沢山のことを知りたいんですか？」

「さあ？多分、それが私の生まれてきた意味だからじゃないのかしら？」

「めぐみさん。僕と結婚して下さい。僕は、必ず幸せにします。いや、めぐみさんは僕が居ないと決して幸せになんて成れないんです」

「あなた・・・。思い切ったことを言ったわねえ・・・」

「いけないですか？僕、細川さんに憑いている大蛇よりもっと大きな大蛇ですかねえ」

「判って言っているのね」

「はい。今僕は大き蛇になっても良い。だって、めぐみさんに僕は必要なんだ・・・」

「ありがとう。でも、それに関してはゆっくり考えさせてくれないかな。それに、涼子ちゃんの問題も片づけないといけないし」

「・・・」

「そうねえ、あなたが大き蛇じゃなくて龍になれば、何時も一緒にいて上げるわ。それだったら、私慣れてるから」私はそう茶化して笑った。

「五十嵐。お前勇気があるなあ。姉さんに面と向かってプロポーズするとは・・・」春樹が感心したように言った。

「えっ？梶さんはしたこと無いんですか？」正巳が驚いて言う。

「ええ、そうよ。この人は一度も言えなかった。根性無しなのよ」

「信じられない・・・。あんなに何時も色んな人に言ったのに・・・」正巳がぼそっと呟く。

「あっ、それは・・・」春樹が慌てて正巳に目配せした。

「もう遅いわよ。ちゃんと聞いちゃったもん」私が笑って春樹に言う。そして、正巳に向かって言う。

「あのね、こういう男を愛したりすると、私みたいな自分しか愛せない女が出来上がっちゃうのよ。だから、私に文句を言う前に、あなたの師匠に文句を言った方が良いわよ」

「梶さん、何故なんですか？」

「あっ、いやあ・・・。要するに恐かったんだなあ・・・。この女の全てを背負い込むことに自信が持てなかった。俺には大きすぎたんだよ。だから、俺と一緒に歩いて貰いたかっただけさ。背負えなくても一緒に歩いてくれたら、ずっと一緒にいられるだろう・・・。でも、姉さんは、さっさと結婚しちまったから」

「梶さん以外に、めぐみさんを幸せに出来る人が居るって思ったんですか？」

「ああ、あの旦那は、俺の兄貴だったことがある。そして、何時も一緒に神であったときの姉さんを担いでいたんだ。俺よりずっと姉さんにとってふさわしいと思った」

「そうですか・・・。僕なんかじゃやっぱり無理ですか・・・」

「そんな事無いさ。今の姉さんは、あの頃の姉さんとは違う。なんせ、バージョンアップしてるからな」

「だったら、余計に無理なんじゃ・・・」

「あなた、もう後悔してるの？今プロポーズしたところなのに」

「いいえ、そうじゃなくて・・・。でも、だんだん幸せにする自信が・・・」

「馬鹿ねえ、あなたが幸せになればそれで良いのよ。それを見ているのが私は好きで傍にいるんだから。だから、涼子ちゃんと幸せになっても良いし、他で良い娘を見つけても良い。多分、私と居るよりずっとあなたは幸せになれると思うわ。だって、その方が龍や死んだ人と一緒にいるような女と結婚するより、ずっとまともですもの」

「まともって・・・。僕の世界を否定する気ですか」

「そうよねえ。あなたの方がその世界には詳しいのよねえ。でも、あなたの求めている男女の愛は、普通以上に普通よ。其処のギャップが上手く埋まらないと難しいかもね。そうだ、安倍晴明だって式神を怖がるような奥さんを持ったから、戻り橋の下に式を隠していたって言う話があるじゃない・・・。その方法で結婚と仕事を分けちゃえば？」

「めぐみさん、またふざけてますね。どうして僕をそんなにからかうんですか？」

「そんな気はないんだけどなあ……。きっとからかいがいがあるぐらい可愛いんじゃないかしら？」

「また、ごまかす……」

「本当はね、恐いの。あなたとそういう関係になることがもの凄く恐いのよ。初めの時からそうだった。それに今でもやっぱりそうよ。怖れるものなんて何も無いって判っててもね、やっぱり怖いものは恐いの」

「梶さんも恐かったから言えなくって、めぐみさんも恐いのか……。でも、めぐみさんは、僕の何がそんなに恐いんだろう？」

「多分、あなたの若さと、真っ直ぐさかな？」

「やっぱり良く判りません」

「まあ、それはそれで良いじゃないか。取り敢えず、細川さんのことは、お前がもう一度行ってなんとかしてみろ。お前が愛についてどれだけ深く考えたかによって、状況は変わるだろう。どうしようもなくなったら、姉さんを連れていくことだな」春樹がそう言った。

「判りました。愛ですね……」

「そうさ、名前の呪術より、もっと強力なものだ。なんせ、全ての元になる物だからな」

「愛が神だから……」

春樹は、黙って肯いて見せた。

正巳はその話が終わった後も、その場に座り込んで黙ってお酒を飲み続けた。

私も、彼に付き合っただけで少しづつ飲む。窓の外はすっかり日が落ちて、部屋の温度が少し下がった。

「やっぱりもう秋ですねえ」正巳がやっと口を開く。

「そうね。少し寒くなってきたわねえ。窓を閉めましょうね」私はそう言って窓を閉めるために立ち上がる。

「めぐみさん。何時になったら僕が恐くなくなるんですか？」私の後ろ姿に向かって正巳が問いかけた。

私は振り向いて答える。「どうして？どうしてそんな事を聞くの？」

「だって、四国でめぐみさんが『恐くなくなるまで待てばいい』って教えてくれたんですよ。恐怖の対象に力を与えずに、そのまま、有りの儘を見ていれば、恐れはすぐになくなってしまっただけ」

私は窓を静かに閉めて、正巳の前に戻る。そして、彼の頬に触れて言う。

「良い子ねえ。ちゃんと覚えてたんだ。でもね、この恐怖は、私のお気に入りなの。だから、自分から手放したりはしないわ」

「どうしても、僕の想いを受けとめてはくれないって言う事ですか？」正巳は悲しそうな目で言った。

「そんな情けない顔をするんじゃないのよ。あなたのこと愛してるって言ったでしょう。それは本当の事よ。ただ、今日みたいに突然何の脈絡もなくプロポーズされたりしたら、誰だって困ってしまうと思うの」私は彼の横に座り直す。

「でも、僕は、ずっと言おうと思いつけていたんです。それで、梶さんが愛の話をしたりしたから、どうしても今言わないと、また言えなくなるって思ったから……」

「そう。ちゃんと受けとめて上げられなくてごめんなさいね。でも、もっと時間をくれないか

しら。きっと、私達にとって一番いい形があると思うのよ。だって、子供を産んで育てたり、あなたの帰るのを家で待ったりするって、今の私には考えられないの・・・」

「何故でしょうね」

「多分、そう言うのに向いてないのよ。だから、前の結婚もそんな形じゃなかった。それでも駄目になっちゃったけど・・・。要するに、結婚には向いてないのよ」

「結婚ってそんなに大変なものなんですか？」

「いいえ、とっても楽しくって素敵なものよ。ただ、向いている人とそうでない人はいるけどね」

「ふう～ん」正巳はそう言って、判ったような分からないような顔をした。

「ねえ、春樹。私いったい何処へ向かっているのかしら？」

正巳の来訪から一週間が過ぎていた。

私は、週末に簡単な仕事を納品した後、一人でお茶を飲みながら春樹に語りかける。

「どうした、弱気になってきたのか？」春樹が優しい感情を伝えながらそう言った。

「ええ、少しね。だって、あんなに一生懸命プロポーズされたのに、私、ちゃんとそれに応えられなかったんですもの」

「そうだな、五十嵐の奴、本当に思い切った事を言ったよなあ」

「そうなのよ。あの時には、あんな風に言って逃げちゃったけど・・・」

「一人で寂しくなってきたんじゃないのか？」

「そうかも知れない。だって、寄る辺ないって感じなんですもの」

「寄る辺ないか・・・」

「そう、大宇宙に独りぼっちって言う感じよ」

「大宇宙そのものなんだが・・・」

「ええ、判ってる。でも、みんなこんな風感じて、寂しくなるんでしょうね」

「ああ」

「それも生きているからなのよねえ」

「おい、姉さん。まだそっちに居てくれよ」

「ええ、そうしないといけないのよね。でも、何もかもが面倒に成っちゃう時があるのよ。だからと言って、正巳の言うように彼と結婚して幸せになろうとも思えない。私、本当に何処へ向かっているのかしら？」

「本気で知りたいのか？」

「まさか？そんな事知ってしまったらあなたと同じ苦しみを味わうことになってしまうじゃない。私はあなた程強くないわ。何も知らないから生きていけるのよ」

「そうか・・・。だったら散歩にでも出てみれば？少し環境を変えて、綺麗な花でも見れば、気持ちも落ち着くさ」

「そうね。公園には金木犀が沢山咲いているんでしょうね」

「姉さん、あの花好きか？」

「ええ・・・。でも、あなたは好きじゃないんでしょう？」

「どうしてそう思うんだ」

「何となくよ。そう、あなたがまだ生きてた時、再会してすぐの頃だったかしら、あなたの記憶を見せられたことがあったじゃない・・・。その一番最後、あの中国の記憶の時に、金木犀の香りが漂っていたから」

「そうか、あれを覚えてたのか。でも、俺、嫌いじゃないぜ」

「私達って、随分色んな花の下で愛し合ったんでしょうね」

「そうだな。此処まで来るのに、長い長い道のりだったから」

「でも、その前世も私のものじゃないんでしょう？」

「ああ。正確にはそう言うことだ。けれど、やっぱり俺と姉さんの物語でもある。辛いことも楽しいことも沢山あった。俺は、ずっと姉さんを愛していたし、姉さんも俺を愛してくれていた。

全てが幻だとは言え、素晴らしい幻だった」

「あの時の私、何故あんなにあなたを責めたのかしら？」

「殺したいほど愛していたんだらう？」

「そうね。あの時のあなた、とっても美人だったもの・・・」

「姉さんだって、良い男だったぜ。地位も権力も全て持っていた。何十人もの女を侍らせて、酒池肉林」

「まあ、あなたの理想の状況だったのね」

「そうさ、あの時の姉さんが、俺の目標だったのさ。だから、俺の女癖が悪かったのも、権力に異常な執着を持ったのも、全て姉さんのせいだ」

「酷いことを言うわね。それは、あなたの資質でしょう？」

「いや、あの時のことがあるから、そう言う資質を持って生まれたんだよ」

「なんでも私のせい？そう言えば、私は何をしても、何もしなくても人を傷つけるって龍に言われたことがあるわ」

「本当に龍がそう言ったのか？」

「いいえ、私がそう言ったのよ。あなたとの不倫に悩んでいた時に。龍は『そうじゃない』って言ったけど、私にはそうとしか思えなかった」

「そうか・・・。俺のせいで、随分悩んだんだな」

「はい、沢山お勉強させていただきましたよ」私はそうふざけて、自分の内にいる春樹に向かって微笑んだ。

春樹も、私の閉じた瞼の裏で、いつもの右肩を少し下げた姿勢で、照れくさそうに笑っていた。

春樹に勧められたように、私は散歩に出てきた。

公園のあちらこちらに金木犀が花を付けている。今年は、一度花を付け、それが散った後、また返り咲いているようだ。やはり天候の不順が自然界にも影響を与えているのだろう。しかし、二度も花を楽しめた事からすると、それもまた悪くないと思えた。

私は、とりわけ大きな金木犀の木の下で佇む。足下に目を落とすと、そこには散った花が絨毯のように敷き詰められていた。次に目を上げると、金色の花が散った花より更に沢山付いている。そして、強い香りが私を包み込んだ。

私は軽い目眩を感じて、目を閉じる。

そう、今年の春、梅林でも同じ様な事があった。あの時は、正巳が突然現れて私を支えてくれたのだ。しかし、今度は一人。私はそっと木に向かって歩み、その幹にもたれ掛かり、もう一度目を閉じて顔を上げた。

何故か目尻から涙が一筋零れた。

私はいったいどうしてしまったのだらう？

あの春樹と再会する前の穏やかな生活。夫が居て、仕事に自分の生き甲斐を見つけ、趣味で物語を書いていた。どれもが中途半端では在ったが、それなりに満ち足りていた。

しかし、私は春樹と再会し、嵐のような二ヶ月を過ごした。そして、春樹はそのまま逝ってしまい、私は一人この場所に残され、自分自身を見失ってしまった。

「ねえ、春樹。私、どうすれば良いのかしら？何を目標にして歩けばいいの？どんな風に年老いて、そっちへ行けばいいのかしら？」

春樹はその問いに答えなかった。

「もう、呆れてものも言えないのね。弱虫の私は、同じ事ばかり尋ねては、知ることを怖れてその答えを聞くことすら拒否しているんですものね」

「姉さん。そうじゃない。あんまり花の香りが強いから、俺も少し悲しくなったんだよ」

「あなたが悲しむなんて……。そんな事って在るの？」

「そりゃあ、在るさ。俺だって人間なんだ。今は身体を持っていないけど、姉さんと居る限り俺は人間だよ」

「そうね。あなたもちゃんと人間なのね」

「ああ」

私は一人でそっと微笑んでみる。最近読んだ本に依ると、頬の筋肉を引き上げ笑顔を作ることによって、脳に刺激が行き心地よくなる物質が分泌されるとか。確かに、それは効果があるようだ。心の中に暖かいものが満ちるのを感じた。

「ねえ、春樹。私って本当にこのままで良いの？」 答えが判っているにもかかわらず、私はそう問いかける。

「ああ。そのままで良い。そのままだよ。姉さんのその悩みは、姉さんだけのものだ。だから、その悩みを抱えてる姉さん自体に、存在意味もあるし、その世界で役にも立っているんだ」

「こんな私が役に立ってるの？」

「そうだよ。姉さんが悩みについて考えることによって、そこで得た答えが全ての人間のためになる」

「どうして？」

「閉じてないからだよ。個に別れてはいるが、閉じては居ない。だから、姉さんの中で起こる変化は、全体の中で起こっているのと同じ事なんだ」

「そうか……。わざわざ言葉にする必要って無いのか……」

「深い意味ではな。しかし、言葉になっていない状態なら誰もが既に持ってる。だから、それを姉さんが言葉というものに乗せて考え、答えを出すことによって、翻訳完了だ」

「それを実践で使ったり、誰かに伝えたりする必要は無いのかしら？」

「無い。いや、姉さんが望むのなら、そうする事も悪くない。だけど、根本的には、姉さんの中で答えが見付かりさえすれば、それで良いんだ」

「なんだか、簡単すぎてあっけないわ」

「まあな……。けど、その答えを見つけ出す……。と言うよりも、それを言葉にするのは、かなり大変なことなんじゃないのかなあ」

「そうかも知れない。それに、私ぐらい暇な心を持って余していなければ、誰もこんな事を考えたりしないわ」

「暇な心か……」

「ええ、きっと心が暇にしてるから、あなたにつけ込まれたりしたのよ」

「酷い言い方だ。この前までは取り憑かれてたで、今回はつけ込まれたか」

「そうよ。あなたは私の愛しき厄介者」

「あーあ。こんなに早く死ぬんじゃなかった」

「どうして？」

「身体を持っていれば、今思いっきり姉さんを抱きしめたい気分なんだよ」

「そう・・・。私もそうして貰いたい気分。でも、それはもう出来ないのね・・・」

「また、五十嵐に物質化して貰うか？」

「痛いわよ」

「それでも良いさ」

「多分正巳はもうしてくれないと思うな」

「どうして？」

「だって、あなた、恋敵よ」私はそう心の中で言って、また一人で微笑む。誰かが見ていたら、本当に何処かが壊れている人だと思われるだろう。

「姉さんは、本当にアイツを受け入れないつもりなのか？」

「いいえ、彼のことは受け入れているわよ。ただ、結婚という形を取るつもりはないの」

「だけど、五十嵐は結婚を望んでいる・・・」

「それはそうだわ。自分の辛かった生い立ちを、我が子を守り育てることでやり直そうとしているんですもの」

「そうか、姉さんには判っているんだなあ」

「それぐらいのことは、私にでも判るわ。でも、私にそれは出来ない。だから、一番良いのは、素敵な若い女性と結婚して貰うこと。その頃には私もお役ご免で、あなたの傍に行けるかも知れない」

「アイツ、そんなに長い間独身で居るのか？」

「そんなに長くはないわ。多分、長くても一、二年の事じゃないかしら？」

「姉さん、そんなに早くこっちには来れないぞ」

「大丈夫。肉体をこちらに置いたまま、魂だけそっちへ移行する・・・」

「姉さん。龍に教えて貰ったのか？」

「何を？」

「今の話だよ。肉体をそっちに置いて、魂だけこっちへ移行するって・・・」

「私、そんなこと言った？」

「おい、姉さん。ちょっとバージョンアップしすぎたんじゃないか？俺にもついていけないぜ」

「どうしたんでしょうね。また判らないことが増えてしまった？」

「いや、ちょっと待てよ。その方法、確かに在るなあ・・・」

「私には、良く判らない。でも、そんな事が出来るんだったら、あなた、死ななくても良かったんじゃないの？」

「多分、俺には無理だ。でも、今の姉さんなら可能かも知れない・・・」

「どっちにしても、必要なことを学び終えてしまえば全て消えるのよ。いつまでも、こんな変な状態で居られるわけないわ。私は、私の道を見つけて歩き、正巳は正巳の道を歩く。それが一番良いのよ。だって、過去生の因縁もそんなにある訳じゃないし、それも一つづつ終わって行ってるんだもの。でも、あんなに強く愛してくれる男が居なくなると、寂しいかもね。愛されるって、本当に心地良いもの」

「ああ、そうだな。その時にはまた、飲まず食わずで入院してくれるか？そうしたら、その時に預けたものを引き上げてやっても良いぜ」

「ねえ、あなた、そんな事まで出来るの？」

「冗談さ。死んだ俺にはもうたいしたことは出来ないさ。ただ、こうして姉さんと一緒にいて、姉さんを愛していることぐらいかな」

「ありがとう。ところで、あなたの哀しみはどうしたの？」

「んっ？ああ、まだ持ってるよ。何故あの時に姉さんが俺を殺したんだらうって・・・」

「そうね、今のあなたみたいに、あの時のあなたを殺してしまえば、自分だけのものになるような気がしたのよ。肉体があるから、他人に取られるって・・・」

「そうか、でも俺はそうなれなかった・・・。姉さんの目の前で、大きな金木犀の根元に、生きたまま首だけ出して埋められ、目を抉られた・・・」

「そう・・・。あなたの目が私以外の人を見たと思うと、どうしても許せなかった。でも、綺麗だったわよ。金色の花の中にあなたが埋まってた。そして、あなたの悲鳴と共に、沢山の花が散ったの」

「あれから何千年経ったんだらう・・・。随分長い旅だったなあ」

「そうね。でも、過ぎてみれば一瞬でしかないわ。あの金木犀はまだあるのかしら？」

「多分、そのものは無くとも、子孫の子孫って言うのが生きてるんじゃないか？」

「そうやって命が繋がっている・・・。でも、私はもう終わり。誰にも私の血は残っていないわ」

「五十嵐と結婚しろよ。そして、子供を作れ。その子供の魂に俺が降りてやる」

「嫌よ。あなたみたいな子供を持つなんて・・・。そんな苦勞するぐらいなら、暇な心を抱えて、あなたにつけ込まれてる方がずっとまし」

「そうかなあ・・・。まあ、あれだけ残虐なことをして、それを綺麗だって言うような母親に育てられる子供っていうのもなあ・・・」

「そうよ。私はそんな罪深き人間なの。だから、人として幸せになんて成るべきじゃないのよ」

「でも、姉さんは幸せなんだらう？」

「そうよ。私は何処にいても何をしても、必ず幸せなんだもん」

「そうだな。幸せでも、悩むし、苦しむ。それで良い」

「ありがとう。あなたがそう言ってくれれば、本当に嬉しくなる。後は、私にいい男を世話してくれればそれで万事オーケーよ」

「そうだな。それは難しいぞ。俺、一生懸命嫉妬心だけは持ち続けてるんだから。誰かが姉さんに惚れたりしたら、そいつに取り憑いて呪い殺してやるよ」

「そんな事が出来るの？」

「ああ、それぐらいならな」

「ねえ、春樹。あなた、本当に成仏した方が良いわよ。もう、正巳も一人でやっていけるし、私も大丈夫だから」

「そうか？それがまだそうじゃない。ほら、そろそろ五十嵐から電話が入るぞ」

春樹の意志がそう告げた途端に、携帯のベルが鳴った。

「あなた、本当に素早く用意を調えたわねえ」上海へ向かう飛行機の中で、正巳に言う。

公園の、金木犀の木の下で正巳からの電話を受けてから十日目だった。

「ええ、めぐみさんがパスポートを持っていてくれて助かりましたよ。まず、パスポートを取ってからだと、もう一週間かかるころだった」

「でも、私、凄く恐かった。だって飛行機に乗るのって……。でも、乗っちゃえば案外平気ね」春樹が飛行機事故で死んで、まだ一年も経っていないのだ。

「僕は全然気にしてないですよ。飛行機に乗らないと、仕事になりませんから、あの後も随分乗りました。それに、めぐみさんが飛行機事故で死ぬなんて考えられない。そういうタイプじゃないですからね。つまり、めぐみさんと一緒に乗っている限り、僕も大丈夫だって言う事でしょう？」

「それは判らないわよ。だって、春樹だってそうは思えなかったもの」

「いいえ、めぐみさんは絶対大丈夫です。それより、窓の下を見て下さい。もうすぐ着きますよ」

そう言われて私は、小さなガラスの二重窓から下を覗き込む。

汚れたガラス越しに見えるそこは、見渡す限り一面泥の色だった。

「ねえ、上海ってこんなに沼地だったかしら？」

「めぐみさん、もっと良く見て下さいよ。船が見えるでしょう？海ですよ。海」

「えっ！」私はそう声を上げてからもう一度目を凝らして見る。確かに、いくつかのタンカーらしき船や、漁船らしきものが見えた。しかしその色は、私の知っている海の色とは全く違う。

「大陸の色ですよ」正巳はそう言って笑って見せた。

飛行機は、すぐに旋回を始め、着陸態勢に入る。斜めになった機体の窓から、規則正しく並ぶ新興住宅が、まるでレゴハウスのように見えた。

上海浦東空港。それは、埋め立て地に作られた、関西空港に良く似た新しい建物。ガラス張りの建物だけ見ていると大阪へ戻ったのではないかと錯覚する程だった。しかし、あの独特な海の色を見たので、そこが中国であることは疑いようもなかった。

「めぐみさん。パスポート持ってますか？」それが、私が携帯に出たときの第一声だった。

「ああ、正巳ね。パスポート？ええ、持ってるわよ」

「期限はどのくらい残っています？」

「十年のを取ってあるから、後五年以上は残っていると思うけど……」

「良かった！だったら、来週末ぐらいに四～五日、仕事空けて下さい」

「どう言うこと？」正巳が、私の仕事のことでそんなに強引な言い方をすることなど、それまで無かったので、私は、何か特別なことが起きているのかと、一瞬身構えた。

「上海へ行くんです」

「私が？」

「はい。とにかく今からパスポートを頂きに上がります。ところで今自宅ですか？」

「いいえ、近所の公園。散歩に出てきたの」

「だったらすぐに戻って下さい。その時に説明しますから」

「判った」私はそう言って電話を切る。

そしてもう一度金木犀の木を見上げて、心の中で春樹に話しかける。「ねえ、何がどうなってるの？あなた知っているんでしょう？」

「さあ？アイツが来てから聞けばいいじゃないか」

「また、変なことに引きずり込まれるのかしら？」

「それも楽しめ」

「無責任な言い方！」私はそう言って、金木犀の木を離れ、家に向かって歩き始めた。

何故上海なんだろう？上海と言えば中国……。さっき思い出していた、大昔の出来事と何か関係があるのだろうか？

自宅に戻って二十分程で正巳が着いた。私は引っ越しで在処の判らなくなっていたパスポートを急いで探しだし、それと正巳ために淹れたコーヒーを彼の前に置いて尋ねる。

「何がどうなっているの？」

正巳は、コーヒーにミルクだけ入れてかき混ぜながら、悪戯っぽい笑顔で言う。

「めぐみさんと僕の新婚旅行ですよ」

「正巳君。そんな冗談を言われるような状態なの？だったら私、入っている仕事を動かしたりしないわよ」

「いいえ、絶対に一緒に行って貰います」正巳はしっかりと私の目を見据えて言い切った。

「どうして？」

「白蛇が、上海へ行けて言ったんですよ。」

「えっ？白蛇ってあのチャネラーの人に取り憑いていた？」

「ええ、そうです。あの後すぐに行ってみたんですよ。そうしたら細川さん、その大蛇が憑いていたんですけど、布団の上に正座して、僕に言ったんです」

「なんて？」私が尋ねる。

正巳は笑顔を浮かべて言う。「上海へ行けて」

「それだけ？」私が尋ねる。

「いいえ、『色々ありがとう。白蛇が御礼にそう言った』って」

「じゃあ、細川さんの件は片づいたのね」

「ええ、本人もホッとした感じでした。でも、もう何度かは障りが出るかも知れません。だけど、それも終わって行く過程だろうって、本人が言っていましたから」

「そう……。だったら良かった。でも、何故彼女……。いや、あの白蛇が上海なんて言ったのかしら？」

「何処かで関係があったんじゃないですか？」

「私と彼女が？」

「多分……。僕には過去生を見ることが出来ないから、はっきりとは言えないけど、細川さんに憑いている白蛇を見ている時にそう感じたんです」

「そう……。それで彼女、私に話すことで納得したのかも知れないわね。でも、上海とはあまりにも突飛な話ね……」

「いえ、直接上海って言った訳じゃないんですよ。唐の国の大きな川の入り口の都って」

「本当に上海で良いのかしら？」

「ええ、それは大丈夫です。ちゃんと調べましたから」正巳は自信ありげに肯いて見せた。

「調べたって？」私が半信半疑で尋ねる。

「蛇の道は蛇って言うでしょう？」そう言って私の顔を覗き込む。

「蛇の話だから？」

正巳は弾かれたように笑うと言った。「違いますよ。霊能、占い関係は、僕のテリトリーですから」

「なるほど……。で、何故そんなに急ぐの？」

「それが、僕の仕事に関係してるんです。だから、費用は全部会社持ちで行けます」

「あらっ、私の分ぐらい自分で出すわよ」

「いいえ、大丈夫です。費用だけじゃなくて、ギャラも出せます。だから、申し訳ないですけど、ビザが取れ次第出発です」

「それで良いのかしら？」

「良いんです。今日のは仕事の依頼ですから」

正巳は急いでそれだけ言うと、私のパスポートを持って帰って行った。

そして、結局それから十日目には、飛行機に乗っていたのだ。

浦東空港に着いて、入国審査を受けた後、私達は外に出た。

正巳は、誰かを捜しているようだった。そして、目当ての人を見つけたのか、右手を大きく挙げて叫んだ。「ウォンさん！」

その声に反応して、三十メートルほど離れたところに居た一人の男性が、正巳と同じように手を挙げた。

「誰なの？」私が正巳に尋ねる。

「香港から僕達のために来てくれたウォンさんですよ。通訳兼ガイド。そして、彼は龍使いです」

「龍使い！」私は驚いて声を上げる。

正巳がそれに驚いて私を覗き込む。「どうしたんですか？龍使いってご存じ無いですか？」

私は、それに対してどう答えて良いのか判らなかつた。『龍使い』それは、私の書いた物語の中に出て来る主人公。あの物語を正巳も読んだのだろうか？

「正巳、あなた私の『龍』の物語読んだ？」

「いいえ」正巳はそう言って首を振った。そして、目の前に歩いて来たウォンと呼ばれた男性と握手をする。

「ウォンさん、わざわざ有り難う御座います」正巳が男性の手をしっかりと握りながら言った。

「どういたしまして」ウォンと呼ばれた男性は、素敵に微笑んで少し訛のある日本語でそう言った。そして、少し表情を引き締めて続けた。

「ミスター梶は、残念なことでした……」うっすらと彼の目が潤んだように感じた。

正巳は黙って俯いて首を振ってみせる。そして、顔を上げてから私を紹介した。

「こちらが、電話でお話した伊藤めぐみさんです」

そして、私の方を向いて彼を紹介する。「ウォン シャオロンさん」

その男性は、親しみを込めた表情で手を差し出す。私はその手を恐る恐る取った。

彼が言う。「ウォンは黄色の字です。シャオロンは小さい龍ね。でも、香港ではみんなアンディと呼んでます」

私はその言葉にまた電流が走ったような衝撃を感じた。しかし、そのまま黙って肯く。

それを敏感に感じて、彼が言った。「私、恐いですか？」

私は慌てて否定する。「いいえ、そうじゃないです。ちょっとびっくりしてるだけだから、気にしないで下さい。正巳君に何も聞かされないまま、此処に連れてこられて、突然紹介されたものだから……。私は伊藤めぐみです。めぐみって呼んで下さい」

彼は真剣な目つきで私を見つめていたが、すぐに優しい笑顔を作って言った。

「車、用意してますから、行きましょう」そして、私の荷物を取って歩き始めた。

正巳と彼は、春樹のことなどを話しながら出口に向かう。私も遅れないように後に続く。

何が始まろうとしているのだろうか？また奇妙なことが起り始めているようだ。

『龍使い』それは、私の物語の中で大きなキーワードになっている。しかし、それを書いた時点での私は、実際にそんな職業があることも知らなかった。今でも龍使いが職業であるかどうか判らない。ただ、私が書いた物の中でのそれは、龍使いの血脈と言う形で登場している。物語の中での龍使いは香港人で名前は、『李小龍。リーシャオロン』。エディリーと呼ばれている。そして、そのエディの兄の名がアンディ……。そして今私の前を歩いているのが『黄小龍。ウォンシャオロン、アンディーウォン』訳が分からない……。

空港の玄関口に、ベントが止まっていた。その後部座席のドアを開けてアンディが言う。「どうぞ乗って下さい」

私が車に乗り込むと、後ろのトランクに私と正巳のバッグを入れた。そして、彼と正巳が前の座席に乗り込んだ。

アンディは、すぐに車を発車させる。正巳が私の方に振り向いて笑いかけた。

「めぐみさん。どうしたんですか？なんか緊張してませんか？」

「正巳君。あなたは私にもっと説明をしておくべきだったわ」私が照れ隠し半分で、少し鷹揚な態度で言う。

「すみません。でも、何をそんなに驚いてるんですか？」

「アンディがタイプなのよ！」私は、冗談でごまかした。

「めぐみさん、またあ」正巳は、ふくれっ面を見せて前を向く。アンディは、ミラーを覗き込みながら私の方を伺っていた。

私はアンディに話しかける。「アンディ、何が見えるの？」彼は、ミラーの中で笑って見せる。私が続ける。「私の龍は、あなたには使えないわよ」

彼は、肩を竦めてみせると言った。「お会い出来てとても嬉しいです」

私も笑顔で答える。「こちらこそ、とても嬉しいわ」

正巳が言う。「ウォンさんは、梶さんの随分昔からの友人なんです」

「ミスター梶とは十年以上のおつき合いです」アンディがそう言った。

「それで正巳君。電話で私のことをどう説明したの？」

正巳が振り返って言った。「もちろん有りの儘を伝えましたよ。めぐみさんの力のことも、梶さんとの関係も、もちろん今僕が一番大切にしている人だって事もね」

「じゃあ、アンディは龍使いって言ってたけど、いったいどんな仕事なの？」

「正確にはフンシェン……。あ〜っ日本語では風水でしたっけ、それですよ」アンディが答えた。

「なるほど、だったら良かったわ」私は本当に胸を撫で下ろした。

「でもめぐみさん。ウォンさんは風水師だけじゃないんです。僕が知ってる限り、梶さんと同じ

ぐらいの力を持って居る唯一の人です。もちろんめぐみさんを除いてですけど」

「春樹と同じぐらいか……。ねえ、春樹ってどのぐらいの力を持っていたの？」

「めぐみさん。今更何を……」正巳が言葉に詰まる。

「だって、アイツが生きていた時は、全く普通の人だったのよ。まあ、普通以上に女好きだったのと、前世を覚えて居て、私を愛していたって言うのが普通じゃなかっただけ」

アンディが握っていたハンドルを叩いて笑った。「ハッハッハッ……。それは良い」

「アンディ、あんまりそこを叩くとエアバッグが飛び出すわよ」私が言う。

「それはいけない」彼が後ろを振り向いて、私にウインクをして見せた。

私はどちらへともなく言う。「ねえ、私は何処へ連れて行かれようとしているのかなあ。誰か教えてくれないかしら？」

「あなたの行きたいところですよ」アンディが答える。

私は自分が何処へ行きたいのかを考える。私が行きたいのは……。

「めぐみさん。まだそこへは行けませんよ！」正巳が振り向いて大きな声で言った。そして、優しい声に戻して言う。「取り敢えず、ホテルにチェックインしましょう。そこでゆっくり話しましょう」

私はそれに肯いて見せた。

窓の外を、根元を白く塗られた木が流れ去っていく。古い形のボンネットトラックや、壊れそうなバンが、かなりのスピードで走っている。そんな中で、正巳の乗っている社長専用車よりも更に高級な車の中で私は、何も判らないまま黙り込んでいた。

『ねえ、春樹。何がどうなっているのよ』春樹はいつものように優しい感情を送ってよこすと、言った。『心配することはない。エディ程じゃないけどアンディも良い奴だ。でも、本当に驚いてたみたいだったなあ。実は俺も姉さんの書いたものを読んだ時、その偶然の一致にも驚いたんだよ』

『でも、李家みたいな財閥って言う訳じゃないわよねえ。それに、ナーガラーじゃなんて組織の長なんて事も……』

『まあな。それに関しては本人に聞いてみると良い』

「梶さん。ご挨拶しますか？」正巳が、私が春樹と会話しているのを敏感に感じ取って、言う。

「ああ、そうだなあ。ウォンシャオロン、久しぶり」春樹が私の口を使って言った。

「?! 梶か？」

「ああ、そうだ。今回は面倒なこと頼んじまって悪かったな。ところでパーパは元気か？」

「本物だ……」アンディが呟いた。正巳が微笑んで肯く。

「はい。パーパはとても元気」

「そうか、それは良かった。この人は俺の大切な人なんだ。だから宜しく頼むよ」

「判った」そう言って、彼はハンドルを切って、ホテルの前に車を付けた。

「めぐみ、着いたよ！」アンディが振り返って言った。

「ありがとう」私はそう言って微笑んでみせる。

アンディはじっと私の顔を見つめて言う。「今、梶はどうしてる？」

「私の中にいるわ」

アンディは黙って首を振ってみせると、車を降りて、私の横のドアを開ける。

「ありがとう」私はそう言って車を降りた。正巳とアンディがトランクからバッグを出して、ベ

ルボーイに何か早口で言った後、私を誘いながらホテルの中へ入る。

アンディと正巳は、私をロビーのソファに座らせると、私のパスポートを持ってカウンターへ行き、チェックインの手続きをする。

そのホテルは、ヨーロッパの建物のような石造りの重厚なものだった。

『まさか、彼のホテルって言う訳じゃないわよねえ』心の中でそっと呟く。

『大丈夫さ』春樹がそう言って笑った。

正巳が戻ってきて、私に中国のお金を渡す。

「はい、当座のおこずかいですよ」

私は驚いて言う。「良いわよ。そんなの……。自分で使う分ぐらひは私が出すから」

「でも、めぐみさん。日本円は使えませんよ」そう言って笑って見せた。そして続ける。

「大きな買い物をした時にはカードが使えるけど、小銭も持っていた方が安心でしょう？」

「それはそうだけど……。じゃあ、後で精算してね」

「気にしないで下さい。じゃあ、部屋に行きましょう」

正巳とアンディは、バッグをボーイに持たせると、そのボーイに続く。

「アンディ、あなたは何処に泊まって居るの？」私が尋ねる。

「僕も此処に泊まって居ます」アンディが答えた。

私達はエレベーターに乗って七階で降りる。私のバックを持ったボーイが、702と書かれたドアを開け、中にバッグを入れたので、私も続いてはいる。

正巳はそこで「サンキュー」と言ってチップを渡し、もう一つの鍵を貰ってボーイを帰らせた。

。

「めぐみさんがこの部屋を使って下さい。僕は隣の703です」正巳がそう言って、その鍵を目の前で振って見せる。

その部屋は思ったよりも広く、入ってすぐのところに立派なソファセットが有り、窓から飛行機の中から見えた海と同じ色をした大きな川が見えた。

ちょっとした間仕切りになっている衝立の奥がベッドルームになっている。

私は引き寄せられるようにそこに入って、年代物のドレッサーの前に立つ。その鏡には何か映っていた。そこにあるはずのない何かだ。それで私は目を閉じてみる。すると、ベッドにちょこんと腰掛けた女性と、その女性に向かって、気を飛ばそうとして身構えている正巳が見えた。

。

私は驚いて、とっさに正巳とその女性の間に入り込む。その瞬間に正巳の放った気の衝撃が私に当たった。いや、それは確かに当たったはずだったのだが、何かに守られているようにその衝撃は私に触れる前に消滅していた。

私は、そのまま正巳に向かって飛びかかり、胸ぐらを掴んで言う。「俺の女に何するんだ！なあんて春樹だったら言ったでしょうね」と笑いながら手を離す。

「めぐみさん！驚いた！」正巳が目をまん丸にして言った。それを見てアンディが笑っていた。

「正巳。何度言ったら判るの？必要のないものは現れないのよ。そして、戦っている限り勝てないとも言ったわよね」私はゆっくりと噛んで含めるように言う。

「でも、めぐみさん……。」正巳が口ごもる。

私は微笑んで見せてから言う。「彼女、私のおばあちゃんよ。一九四〇年代から六〇年あまりも此処で私を待っていてくれたの。それを突然吹っ飛ばしちゃ失礼でしょう？私は暫く彼女と話してみるから、あなたは自分の部屋で休んでいて。後で私も行くから」

「判りました」正巳はそう言って、ベッドに腰掛けた女性に丁寧に頭を下げた後、部屋を出た。

。アンディも、私にウインクをしてみせると、笑いながら正巳と一緒に出て行った。

私は、目を閉じ、ベッドの前に跪いた。そして、彼女に言う。

「伊藤すずさんですよ。旧姓は五木すず」その女性は静かに目を上げた。

「私、写真を見て知っているんです。あなたの孫ですよ。あなたの末の息子、令治の娘です」

彼女は静かに肯いてみせると、潤んだ瞳で私を見る。

私は、微笑んで見せてから言う。「辛い時代でしたね。でも、あなたの子供達はちゃんと育ちましたよ。私の父以外は、孫も持ってるわ。私だけ、一人っ子なのに子供を産んでいないから、父は孫を抱けなかったけど」

「みんな元気ですか？」弱々しい思考が伝わった。多分、時間が経ちすぎたのと、元々それ程強い念ではなかったのも、形を維持するのがやっとなのだろう。

「残念ながら、長女と末っ子の父は、他界しました。でも、あなたや、おじいさんよりは長生きしましたよ。だから、安心して下さい」

彼女の瞳から大粒の涙がこぼれ落ちた。私はそんな彼女が愛おしくて思わず抱きしめる。それは、弱いエネルギーの塊。物質として存在しているわけではないが、微かな手応えのある、何かだ。

私は彼女を離し、手を取って言う。「子供達が心配だったのね。だから、此処で待ち続けたんだ」彼女が静かに肯いた。

「ありがとう。こんなに長い間待っていてくれて」私が言った。そう言葉にした途端私の目からも涙があふれ出した。

「令治の子供……。名前は？」弱々しい手が私の頭を撫でながら言った。

「めぐみです」私は嗚咽を堪えて答えた。

「めぐみ。良い名前……。お前は今幸せかい？」

私は力強く肯く。

「そうかい、それが一番良いね。私も、お前に会えて初めて幸せに成れたよ。生きていたときも、死んでからも、一度も幸せだなんて思ったことはなかった。でも、待っていて良かったよ。こうして孫が会いに来てくれたんだから……。」そう言って波引くようにだんだんエネルギーが無くなっていった。そして、目を閉じた私の脳裏に、何も映らなくなった時、私は声を上げて泣いた。

私はひとしきり泣いて、化粧を直してから隣の部屋へ行った。

「お待たせしました」ドアを開けてくれたアンディに言った。

「めぐみ、大丈夫かい？」アンディが私を気遣ってくれた。

「大丈夫よ」私はそう言って笑って見せる。

「さあ、中へどうぞ」アンディが中へ招き入れてくれた。

正巳が中国風のティーポットからお茶を注ぎ分けているところだった。

「丁度良かった。今ルームサービスで届いたところですよ。本場のウーロン茶をどうぞ」正巳がそう言って笑った。そして、私の座る場所を指し示してから続ける。

「めぐみさん。そう言えば前に梶さんが、めぐみさんも不良だったって言ってましたね。僕は信じてなかったけど、さっきので本当だったんだって良く判りましたよ」そう言って自分の襟元を掴んで見せた。

「そうよ。だって、あの春樹と付き合うには、そのぐらいの根性が無ければ、弟兼恋人代理でも

釣り合いがね」私はそう言ってウインクして見せながら、彼の指し示した場所に腰を下ろした。アンディも私の隣に腰掛ける。

「とてもしっかりした女性だ。梶の好みにぴったり」アンディが私の方をちらっと見てから言った。

「大和撫子は、強いだよ。でも、さっきのは半分春樹よ」

「俺は知らないぜ」春樹が突然私の口を使って言った。

「しらばっくれるんじゃないわよ。途中で私が止めなければ、正巳と大喧嘩になってたくせに」私が春樹に向かって言う。

「まあな。五十嵐、お前姉さんを傷つけたりしたら、本当にただじゃおかないからな」春樹が凄んで見せた。

「すみません」正巳が殊勝な顔で言った。

「面白いねえ。本当に梶が居るみたいだ」アンディが感心したように言う。

「居るんだよ。姉さんの中に俺は居る」そう言って春樹がアンディに向かって手を差し伸べた。その手をアンディが握る。

「梶の手にしては柔らかい……。しかし、確かにこれは梶のエネルギーだ」

私はアンディから手を取り戻してもう一度手を差し伸べる。「これが私よ。宜しく」

アンディがその手を取り直してもう一度握手した。「これは女性の手だ」

正巳が面白そうに笑っていた。

「正巳、これからどうするの？」私が尋ねる。

「ええ、まだ夕食には早いので、暫く此处で休みましょう。行動を始めるのは明日からです。今日はウォンさんに慣れて貰わないと」

「慣れるって？」私が尋ねる。

「その不思議な関係にですよ。慣れないと明日から戸惑うことも多いと思うから」

私はそれに肯いて見せてから、アンディに尋ねる。

「あなたは、どんな力を持っているの？私と春樹の違いをどんな風に見分けるのかしら？」

「僕に判るのは気の流れと、その種類です」

「私と春樹を見分けるのって大変じゃない？」

「多分大丈夫です。めぐみと梶のエネルギーは、良く似てるけど、やっぱり違うから。それに、みんな違う名前呼び合ってるみたいですよ。だから多分それでも見分けられると思いますよ」

「えっ？違う名前？」私には何のことか判らない。

「梶はめぐみを姉さんと呼んだ。めぐみは五十嵐君を正巳と呼ぶけど、梶は五十嵐と呼ぶ」そう言ってウインクして見せた。

「だったら、私がアンディって呼んだらあなたは判らなくなったりしない？」

「大丈夫、梶は僕のことアンディとは呼ばなかった。梶、いつものように呼んでくれないか？」アンディが私の中の春樹に向かって言った。

「シャオロン。これで良いのか」春樹が言う。

「それで良い」アンディが笑って見せた。

「面白い。今まで気づかなかったけど、みんな違う名前呼んでたんですね」正巳が言う。

「そうね。みんなそれぞれ違う幻として存在しているから、呼び方が違うのね」私も感心して言った。

「ところでめぐみさん。さっきの霊のこと話して貰えませんか？」正巳が興味深そうな顔で言った。

私は彼が注いでくれたお茶を飲んで言う。「やっぱり本場のウーロン茶は美味しいわね」

正巳がそれに微笑んで肯く。「沢山買って帰ると良いですよ」

私も肯いてから話し始める。

「あれは、私のおばあちゃん」

「比叡山で修行した人の奥さんですか？」正巳が尋ねる。

「あれは母方。さっきのは死んだ父の母親よ。彼女は父がまだ三歳になるか成らないかの頃に家を出て居なくなっちゃったのよ。父が一番下で、一番上と十歳ぐらい離れていたと思うから十三歳ぐらいを頭に、三人の子供を捨てちゃったのね」

正巳は、顔を歪めてみせる。私はそんな正巳に微笑みかけてから続けた。

「酷い時代だったのよ。それと、彼女の夫、つまり私のおじいちゃんね、そいつもかなり酷い男だったんだと思う。そうそう、春樹みたいな奴だったのかもね。女遊びはするし、事業には失敗するし……。多分気の小さな男だったんじゃないのかしら？それに関しては誰も語らないから私は良く知らないけど。でも、おばあちゃんが、大切な子供を置いて逃げたって言うくらいだから、推して知るべしって感じじゃないのかしら？噂ではかなり気の強い女性だったみたいだし、貧乏には耐えられても、愛人には我慢できなかったのかも知れないわね。それで、妻に逃げられたおじいちゃんは、本土で事業にも失敗していたし、子供を連れて満州へ渡って、また一旗揚げようなんて脳天気と考えてたらしいわよ。でも、そこで事故にあって結局父が六歳ぐらいの時に満州で死んじゃったの。幼かった父が骨壺を抱えて船で日本に帰ってきたって聞いたことがあるわ。後は親戚に預けられて育ったみたいだけど」

「その時にも全然おばあさんは現れなかったんでしょうかね」正巳が尋ねる。

「さあ？少なくとも父は知らなかったみたい。上の二人はもしかしたら知っていたかも知れないけど、六歳の子供には何も言わなかったんじゃないかしら？でも、やっぱりそのままになっているって言う事は連絡は無かったんじゃないかなあ」

「さっきめぐみさんは、どうしてすぐにおばあさんだって判ったんですか？」

「写真があるのよ。それと、私と似てたでしょう？」

「それだけで？」

「いいえ、何かやっぱり血の繋がりがって判るものなのね。鏡に何かが映ったから目を閉じたら、彼女と身構えているあなたが見えた。その瞬間におばあさんだって判ったの」

「僕は、きつとめぐみさんが怖がるだろうって思ったから、気づく前に処分してしまおうって……」

「気を遣ってくれてありがとう。でも、血だらけの悪霊なんかじゃなければ、大丈夫よ。それに、そう言うのの時は春樹がスイッチを切ってくれるって言ってたから、大丈夫」

「本当にすみませんでした」正巳が殊勝な顔で謝った。

「気にしないで良いわ」私はそう言って笑って見せてから続ける。

「噂では彼女も子供を追って満州に渡ったらしいの。誰かが満州で見たって言う話があって。でも、おじいちゃんが死んだ時に彼女が満州に居たのなら、一番下の子供だけでも引き取ったんじゃないのかなあ？それをしなかったって言う事は、その時にはきっと満州には居なかったのよ。その頃女一人で生きていくって並大抵じゃなかっただろうし、満州を出て上海の租界辺りに流れ着いていたっておかしくないもの。それに、その後すぐに終戦でしょう？日本に帰れてたのなら、やっぱり可愛い盛りが一番下の子供にだけでも会いに来たと思う。それが母親の情だと思いの。それをしていないって言うことは、それが出来なかったって言うことでしょうか？さっき

見たおばあちゃん、今の私より絶対若いわ。つまり、おじいちゃんが死んだ頃に、やっぱり此処で死んでたんじゃないのかな？それで、此処に念を残して留まってしまったんだと思う。なんだか辛くって彼女には何も尋ねられなかったけど、とにかく彼女が気にしている子供の話を話して、ありがとうって言って抱きしめたら、消えてしまったわ。それにしても親子の情って六〇年もの間、何の力もない女性の姿を、空間に残すほどの力があるのね」

「それも愛ですか？」

「多分ね。それに引き寄せられるのも愛だし……。でも、今日ここで会えて本当に良かったわ。彼女、生きていた時も、死んでからも幸せだって思った事なんて無かったって言ってた。そして、今日孫の私に会えて初めて幸せだって思えたって言いながら消えて行った。あなたには惨い話に聞こえるかも知れないけど、子供を捨てる親も、それなりに大きな傷を負っているのよ。親を愛せない子供も、子供を愛せない親も、どちらも悲しいわね」

正巳が肯いて言う。「愛ってやっぱり悲しいのかなあ？」

「おっ！ちょっとは愛が判るようになったか！」春樹が茶化す。

「梶さん」そう言って、正巳が私の中の春樹をにらみつけた。

「ところで、アンディは何をしてくれるの？」私がどちらへともなく尋ねる。

正巳とアンディが顔を見合わせてどちらが話すべきかを決めている。そして、説明を始めたのは正巳だった。

「実は、細川さんに会いに行った後すぐにウォンさんから電話があったんですよ。別に用があったというわけでもなかったんですが、『どうしてる？』って言う感じでしたよねえ」正巳がアンディにそう言った。

「はい。でも、何か予感がしたんですよ。それとパーパにも突然梶のことを尋ねられたのです。

『梶は、元気しているのか』って……。それで電話しないでは居られなかった」

「アンディは春樹が死んだのを知ってたんでしょう？」

「はい。でも、父も知っていたのに、呆けた振りをしてわざと尋ねた。パーパはそう言う人なんです」

「めぐみさん。ウォンさんのお父様は、梶さんの風水の師匠でもあるんです」

「春樹って、色んな事を勉強してたのね」

「見直したか」春樹が言った。

「幾ら色んな事を学んでも、そんなに早く死んじゃったら何の役にも立たないでしょう」

「それは言える。姉さんには敵わない」

アンディが笑いながら言う。「僕の父は、風水師として一流なだけでなく、不思議な力があります。自分がすべき事に関して判るんです」

「自分がすべき事？」私が尋ねる。

「はい。多分、五十嵐君に僕の力が必要だと感じたのでしょう。それで、僕にわざと尋ねて電話するようにし向けた」

「なるほど……。それで、電話したのね。そうしたら丁度中国の話があったって言うこと……」

「そうなんです。それで、細川さんの話をウォンさんにしたら、その場所は間違いなく上海だって。それで、急いだ方が良いて言われて、此処まで来たんですよ」正巳が言った。

「で、何があるの？」私はアンディの顔を見ながら尋ねる。

「それは、明日から始まる。僕に判るのはそれだけです。僕もパーパも全てが見通せるわけじゃない。その時その時に必要なことが判るだけ。今この時点で僕達が集まって、此処に居る必要が

ある。そして、明日蘇州に向かって車を走らせる。何をすべきなのかは五十嵐君とめぐみが知っている」

「なんだかい加減ねえ・・・」私がため息混じりに呟いた。

「そうでもないさ。姉さんと五十嵐にとって必要なことがそこにあるから、手伝いに来てくれた。そして、シャオロンにとってもそれは必要なことだからだ。シャオロンの力は、信じる力だ。シャオロンは全てのことを有りの儘に信じる事が出来る。それは、見える物も、見えない物も同じレベルでだ。だから、俺のことも姉さんのこともちゃんと理解できるんだ。それが姉さんの一番欲しかった物じゃないか」春樹はそう言って暖かな感情で私を満たす。

「ありがとう。あなたはまた、私の為に力を貸してくれたのね。この前みたいにあなたが痛くなければいいけど」

「大丈夫さ。その為にシャオロンに来て貰った。それに、俺はもう五十嵐に降ろして貰えそうにないからな」そう言って正巳に向かって笑う。

「もちろんですよ。誰がわざわざ自分の好きな人を他人に抱かせたりするものですか！」

「俺のだって言っただろう！お前にはやらん」春樹がいつものように正巳をからかう。

「それで、めぐみはどうなの？」アンディが笑いながら私に尋ねた。

「何が？」

「五十嵐君と梶のどっちを取るの？」アンディが笑って尋ねる。

「私はどっちも好きよ。でも、どっちも愛人であって、結婚相手では無いわ。正巳は若すぎるし、春樹は死んでる」

アンディは自分のこめかみに指を当てて、顔をしかめて見せた。「それは、どうしようもないね。だけど楽しそうだ。その中に僕も入れて貰えるかな？」

正巳が慌てて言う。「ダメですよ。これ以上ややこしくなると大変です。もう一人、めぐみさんの別れた旦那さんだって居るわけだし・・・。ウォンさんだって奥さんが居るんだから、めぐみさんに手を出したりしないで下さいよ」

「まあ、良いじゃない。お互いに気に入らないより、ちょっと好きなくらいの方がこれからのためにも」私が冗談半分に言う。

「だいたいめぐみさんがそんな風に優柔不断だからこう言うことになるんですよ」

「ほらほら正巳君。そんなに怒らないの。そんな風に邪険にしているとあなたよりずっと優しい春樹のところへ行ってしまうんだから」

「だから、それはダメだってさっきも言ったでしょう。それに、梶さんが優しかったのは、めぐみさんにだけじゃありません。梶さんは全ての女の人に優しかったんです。だから、めぐみさんはまだ僕の手の届くところにいて下さい。幾ら梶さんのところへ行きたがっても、僕が離しませんよ」

「おいおい、お前までそう言う言い方をするか。確かに女は好きだったけど、姉さんだけは別だったんだぜ」春樹が言いわけがましく言った。

「まあ怖い！まるであの大蛇ね」私は正巳に向かって大げさに驚いてみせる。

「僕、あれからずっと考えてたんです。あの細川さんに憑いていた白蛇について・・・。それで思ったんですけど、彼女、結構幸せだったんじゃないのかなって・・・」

「どうしてそう思ったの？あなたあんなに嫌がっていたのに」

「でも、あんなに一人の人を思い続けて、呪い殺してしまうほど愛して居たわけでしょう？それってやっぱり凄いことですよ」

「そうよ。でも、彼女は幸せじゃなかった」

「そうなんですよね・・・」

「でも、彼女も幸せになる方法があったのよ」

「どう言うことですか？」

「さっきおばあちゃんに会って判ったの。彼女も自分の幸せを認めれば良かっただけなのよ。生きているときも死んでからも何一つ幸せなんて無かったっておばあちゃんは言った。でも、そこに幸せはいっぱいあったはずよ。子供が産まれたときもきっと幸せだって思っただろうし、やっと嫌な夫から逃げ出せたときだって幸せだったのよ。きっと細々と幸せは沢山落ちてたって思う。だから、それを認めれば良かったの。あの白蛇さんだって、あなたが羨むほど愛していたわけでしょう？それ程愛する人と出会った幸せを、自分で噛みしめればそれで良かったのよ。そうすれば、幸せは幸せを連れてくる。不幸は不幸を連れてくる」

「なるほど・・・。確かにそれだともし念が残っても楽しい記憶だけですね」

「そう言うこと。私は今あなたにも春樹にも愛されてる。だから、その幸せをちゃんと認めるわ。あなたと家庭を持って幸せを掴まなくっても、私はこのままの私で十分に幸せだからそれで良いの」

「めぐみさん。やっぱり僕から逃げるんですか？」

「きっとあなたに追いかけて欲しいのよ」私はそう言って笑って見せた。正巳はいつものようにふくれっ面で俯いた。

アンディがそれを見ながら笑う。「梶、これは面白い。梶は面白いプレゼントをしてくれた」

「そうだろう。でも、この二人は、面白いだけじゃないぞ。特に姉さんの強さは、シャオロンにとっても驚異かも知れない・・・。俺と姉さんが何度も生まれ変わりながら作り上げた最高の作品が、今の姉さんだ。後でパーパにちゃんと報告してくれよ」

「確かに不思議な女性だが、そんなに強いとは思えないが・・・」

正巳が笑って見せる。「そうですよ。本当に普通の人なんです。ちょっと僕をからかうのが好きなだけの・・・」

「それはしょうがないわよ。私の趣味ですもの」私が首を竦めて見せて言う。

「めぐみさんの強さは、普通の人が持っている本当の強さです。僕達のようなまやかしの力じゃない。多分、色んな経験をして生まれ変わって、結局シンプルな強さに辿り着いたんだと思いますよ」

「シンプル・・・」アンディがその言葉を繰り返した。

「ああ、そうさ。シャオロンにとってそれが一番必要な事じゃないのか？」春樹が言った。

「梶・・・。お前、今の僕のことを知っていたのか？」アンディが言う。

「違うのよアンディ、春樹は必要なことしか起らないって言う事を知っているだけ。だから、見て居た訳じゃないの」

「姉さん、ネタばらしするんじゃない」春樹が文句を言って、私が首を竦める。

「なるほど。これは、明日からが楽しみだ」アンディはそう言って笑った。

お茶を飲み終わってから、それぞれ夕食の時間まで自分の部屋に戻る事にした。

私は、部屋に戻ってベッドに身体を投げ出す。結構疲れていた。前日の夜中まで仕事をして、朝一番にそれをコンビニから宅配便で送り、飛行機に乗って此処まで来たのだ。たった三時間。もう少し長ければ、飛行機の中で寝られたのだが、食事を取っているうちに着いてしまっていた。そして、ホテルに入って早々、おばあちゃんの霊と出会って泣いた。「泣くって結構疲れる」

私はそう呟いてそのまま眠った。

ドアのチャイムが鳴った時、私は夢を見ていた。悲しくて仕方がない夢。私は泣きながら目覚めた。そして、まだ半分夢の中に私を置いたままふらふらとドアのそばへ行く。

「誰？」

「僕です」正巳の声だった。

私はそのまま鍵を解除し、ドアを開ける。

「どうしたんですか？」正巳が涙で濡れた私の顔を覗き込むようにして言った。

「悲しい夢を見ていたのよ。それより何？」

正巳は力強く私を抱きしめると、頭の上で言う。「大丈夫。僕が居ますから。何も悲しい事なんて無いんですよ」

私はそれを聞いてまた泣きじゃくる。そう、夢の中で誰かに抱きしめて貰いたいのになんか出来なくて泣いていたのだ。

「めぐみさんの声が聞こえたんです。めぐみさんが僕を必要としていた」正巳のくぐもった声が胸を通して聞こえた。

「ありがとう」私はそう言ってそのままひとしきり泣いた。正巳はいつかの春樹のようにただ黙って強く抱きしめていてくれた。

泣き終わって正巳の胸から離れる。

「スッキリしましたか？」正巳が尋ねた。

「ええ、でも、なんだか馬鹿馬鹿しい気分よ。だって、この年になって夢で泣いたなんて」

「それでも良いんですよ。色んな物が泣くことによって涙と一緒に流れ出してしまいうんですから」

「でも、あなた、本当に良いタイミングだったわ。ありがとう」

「どういたしまして。出雲の時からこれが僕の仕事になったみたいですね」

「そう言えば、あの時も胸で泣かせてくれるためにあなたは来てくれたのよね」

「はい。僕も一番初めの時にめぐみさんの胸でお世話になりましたから・・・」

「そうね。みんな泣くことで癒さないといけない傷を持っていたのよね・・・。でも、私今日は何故泣いたのか判らない・・・」

「多分、さっきのおばあさんが泣きたかったんですよ。誰かに抱きしめて貰いながら、思いっきり・・・」

「そうね。それで彼女も癒されたかしら？」

「多分。血の繋がりがってそう言うものかも知れませんよ。僕もいつか本当の父親に出会ったら、判るかなあ・・・」

「そうね、あなたは知らないのね・・・。るあさんに尋ねないの？」

「ええ、母はそのことに関しては何も話したくないようです。だから僕も尋ねない」

「でも、いつかは何処かで会えるかも知れないって思ってるのね」

「そうですね。だけど、母が言いたくないって言う事は、僕は知らない方が良いんだと思います。それに、母はあんな気性だから、僕が生まれたこと父に知らせてないと思うな。だから父は僕が居ることすら知らないんじゃないかな？」

「そうか、まあ、色々ね。その分丹波のお父さんにも愛されたし、春樹にも愛されたんだもの、それなりに良かったって言うことにしておきましょうよ」

「そう言うものでしょうか？」

私は肯いて笑って見せる。

「めぐみさんも愛してくれていますよね」正巳が肩を抱き寄せて言う。

「もちろんよ」私はそう答えて軽く口づけした。

「涙の味がしますよ」正巳がそう言って笑った。

「昨夜はよく眠れたかい？」アンディが後部座席の私を覗き込むようにして尋ねた。
「ええ、とっても良く眠れたわ」私は微笑んで答える。

昨夜、泣き終わった私は、暫く正巳と手を繋いだまま窓の外を見ていた。
「このままじゃ何故いけないの？」私が尋ねる。
「いつも一緒に居たいって思うのって、贅沢ですか？」正巳が言った。
「そんなにいつも一緒にいられるものじゃないわ。春樹みたいに肉体を捨ててしまったものは別
だけど。結婚したからっていつも一緒にいられるものじゃないのよ」
「でも、僕、帰る場所が欲しいんです」
「だったら寂しいときだけ私のところへ来れば良いじゃない」
「でも、そこは僕の帰る場所じゃない・・・」
「あなた、やっぱり良い人見つけて結婚しなさい。そして、子供でも出来たら、私と遊べるよう
になるわ」
「めぐみさん、それって変ですよ。それに、僕はそんな浮気性じゃない」
「そうね。春樹みたいに上手く遊んだり出来ないでしょうね。大丈夫、あなたが私を必要とし
なくなれば、私は自然にあなたの元から消えていく。もちろん、春樹も一緒にね」
「梶さんを飲み込んだまま、死んでしまうんですか？僕はそんなの絶対嫌だ」
「違うわよ。死だけが別れの方法じゃないの。誰もが日常的に出会いと別れを繰り返している。
特別な人じゃなくてもね」
正巳はそれを聞いて繋いだ手を強く握りしめた。私は窓の外を見ながら続ける。
「だから、今こうしていることを大切にしておかないといけないの。こんな時間があつたって、
あなたの記憶の中に留めておくのよ。そして、その見出しのところに『幸せの記憶』ってラベル
を付けておくのも忘れないでね」
正巳は、繋いだ手をたぐり寄せるようにして、私を抱き寄せる。
「めぐみさんは、本当に幸せなんですか？たった一人で生きていて、それを幸せだって言うん
ですか？」頭の上から聞こえるその声は、少し涙声だった。
「ええ、そうよ。どんな時でも私は幸せ・・・。最愛の人を失っても、やっぱり生きて行か
なくちゃいけない・・・。そして、愛してくれていた人に去られてしまってもやっぱり生きてい
るの。生きている限り私は、幸せでいなくちゃいけないのよ」
「何故・・・」
「私がそう決めたから。だから、死んでまで私をサポートしてくれる魂もいる。私が幸せで居よ
うと思わなくなったら、きっと春樹は居なくなっちゃうでしょうね」
「梶さんが居るから幸せなんですか？」
「違うわよ。私が幸せでいようとしているからアイツが居てくれるの」
「僕じゃどうしてダメなんですか？」
「ダメなわけ無いじゃない。あなたはこんな私をこうして抱きしめてくれるわ。春樹はもう抱き
しめてはくれないもの・・・」
「僕、梶さんの代わりなんて嫌だ」正巳はそう言って乱暴に口づけした。

私はそんな彼の頭に掌で触れながら、その長い口づけを受け入れた。

「すみません」正巳は口づけを終わって謝った。

「私の方こそゴメンね。私は、あなたと春樹を比べたりはしないのよ。だって、あなたはあなた、春樹は春樹ですもの。でも、あなたもそうだと思うけど、春樹を忘れることなんて不可能なの。そして、彼を忘れないままあなたと結婚するなんて出来ない。私は、こうして、今のままの幸せを大切にしていきたいのよ。だけど、それを永遠に続けようとも思わない。全てが変わっていく。それが自然なの」

「それを受け入れることがめぐみさんの強さですか・・・」

「私はちっとも強くななんて無いわ。だって、こうしてあなたの胸で泣かなきゃ成らないことが沢山あるんですもの。強い人はこんなに泣いたりしないものよ」

「そうじゃない。ちゃんと泣けることが一番強いんです」

「そう言えば、悪霊だって、ちゃんと泣けば悪霊じゃなくなるんですものね」

「そうですよ。ちゃんと泣けない心の弱い者が祟るんです」

私は微笑んでみせる。「私酷い顔になってるから、シャワーを浴びて、お化粧を直すわ。だって、この顔で食事に行ったら、せっかくアンディに好きになって貰えそうだったのに、嫌われてしまいそうよ」

「めぐみさん、さっきはどうしてあんなに驚いてたんですか？」

「私の物語に、リーシャオロン、エディリーって言う香港の龍使いが出て来るのよ。そして、そのエディのお兄さんがアンディって言う名前なの・・・」

「偶然ですか？」

「ええ、さっき春樹もあれを読んだ時に驚いたって言ってたわ」

「めぐみさんの物語の中で、そのエディって、どんな役割ですか？」

「私の龍を使う、龍使い・・・。そして、春樹よりももっと強く私を愛してくれた男」

「それで驚いていたわけですね。でも、ウォンさんは多分違うと思いますよ」

「もちろんよ。彼、エディは私の中にいるの。出雲のフツシと一緒に」

「不思議ですね・・・。そうだ、タイロンに会えば、もっと色んなことが判るかも知れませんよ」

「タイロン！」私はまた大声で言った。

「どうしたんですか？」正巳も私の反応に驚いて言った。

「エディのお爺さまの風水師の名前よ」

「ウォンさんのお父様がタイロンです。梶さんの風水の師匠」

「いい加減にして！頭が変に成っちゃいそう」私は頭を抱える。

「誰に文句を言ってるんですか？」

「ごめんなさい。これは龍に言ってるのよ」

「僕は、部屋に帰ってますから、めぐみさんはシャワーでも浴びて、気持ちを落ち着けて下さい」正巳は優しく笑ってそう言った。

「そうするわ」私も微笑み返してそう言う。

正巳はドアを開けて出て行く時に振り返って言う。「今夜、泊まりに来て良いですか？」

「どうぞ」私は冗談だと思って軽く答えた。

約束の時間に、そのホテルの上階にあるレストランに行き、三人で夕食を取った。

「乾杯」正巳がビールのグラスを持ち上げて言った。

「乾杯」私とアンディも同じように言う。

料理は、アンディが一番美味しいと思うものをチョイスして頼んでくれた。もちろんこの時期上海ガニは欠かせない。

正巳は、ビールを飲み終えて、老酒を貰う。私は軽めの中国ワインを貰った。

「五十嵐君。そんなに飲んで大丈夫なの？確か君はお酒が飲めなかったんじゃないっけ？」不思議そうな顔でアンディが言った。

「ええ、飲めるようになったんです。これもめぐみさんのお陰ですよ」そう言って笑う。

「私のせいじゃないのよ。過去生での問題を解決したら、突然大酒飲みになっちゃったの」私がアンディに説明した。

「前世療法ですか？」

「この人、昔お酒を沢山飲まされて騙し討ちにされたことがあったのよ。それも、女の人に……。それでどっちもの恐怖症があったんだって」アンディが私の皿に載せてくれた上海ガニの足ははずしながら言う。

「梶の傍にいて、女性恐怖症は辛かっただろうね」アンディが笑いながら言う。

「いいえ、僕には梶さんが居たから全然平気でしたよ」正巳は結構ハイピッチで飲んでいるわりに、ほとんど顔色も変えずにそう言った。

「本当に可愛がっていたもんなあ……」アンディが遠くを見るような目で言った。

「そうだよ。俺は、こいつが可愛くて仕方なかった」春樹が正巳の口を使って言った。

「？」アンディが身を乗り出して正巳の顔を見る。

私は笑いながらそんな彼に言う。「多分、春樹の奴、自分も飲みたいんだと思うわよ。それで、今度は正巳の方に降りたの」

「梶さん、明日に差し支えない程度で止めて下さいよ」正巳が自分の内にいる春樹に向かって言った。

「どうなってるんだ？」アンディが、ふうーっと息を吐いて、椅子の背もたれにもたれ掛かる。

「誰が説明するの？」私が言う。

「姉さんは食べるのに夢中みたいだぞ。五十嵐、お前しろ」正巳の口を使って春樹が言った。

「もう、大変なことは全部僕なんだから」少し酔いの回った正巳がいつもより砕けた感じで言う。

「この子、お酒を飲むと、とても付き合いやすくなるのよ。いつもの堅物が大変身なの」

私はそう言ってアンディに笑いかけてから、新しい料理に箸を付ける。

「めぐみさん、あんまり食べると太りますよ」正巳がそう言ってから説明を始めた。

「ウォンさん。こうして僕とめぐみさんが一緒に居ると、梶さんはどっちにでも好きな方に降りられるんです。初めの頃は、名前の呪術で僕に降ろしていたんですけど、上手く繋がったらしくて、好きな時に降りてきます。僕一人の時には今でも名前を使って降ろす必要はありますが、めぐみさんが傍にいと、なんの手順も必要ないし、降ろすための精神統一も必要ない。そして、梶さんが降りているときも、僕は僕のままで居られる。ただ、梶さんが話したい時に話し出すだけみたいです」

「だけど、普段はめぐみと一緒にいるんだね？」アンディが言う。

「今でも私と一緒にいるのよ。彼は私のエネルギーに寄生してるの」私は箸を置いて言った。

「ねえさん、そう言う言い方はやめろって言っただろう？」春樹が今度は私の口を使って言う。

アンディが驚いて私の方を見る。

「でも、そうなんですよ。めぐみさんのエネルギーの中で梶さんが存在しているから、傍にいる

ときだけ、僕と一緒に存在できるんです」正巳が笑いながら言った。

「五十嵐君はどんな感じなの？」アンディが正巳の方を向いて言う。

「初めのうちは、半分だけで生きていて、後の残りを梶さんに貸しているって言う感じだったんだけど、今は、全然普通と変わりません」

「あら、それ、初耳よ。正巳も随分慣れたのね」正巳が笑って見せてから、空になった私のグラスにワインを注ぐ。「めぐみさんも、お酒、随分強くなったんでしょう？」

「いいえ、飲むとすぐに眠くなるから・・・」

「これは、早く慣れる必要がある・・・」アンディが独り言のように呟いた。

「ウォンさんならすぐに慣れますよ」正巳はそう言ってまたグラスのお酒を飲み干した。

「ところで正巳、仕事でこっちへ来るって言ってなかったっけ？」私が尋ねる。

「はい、そうですよ。ウォンさんを口説きに來たんです」

「どういう事ですか？」アンディも初耳というように聞き返す。

「実は、ウォンさんにメモリーの仕事を手伝ってもらいたくって・・・」正巳は少しだけ畏まって言う。

「君の会社の仕事ですか？」

「そうです。香港支社を任せたいと思って・・・」

「カウンセリングの方で？」

「それと、セミナーも出来れば。それで、良い機会だから、そのお話をしたいと思っていました。でも、返事はそんなに急がなくても良いですから」

「なるほど・・・。それで私をだしに使ったわけだ・・・」私が言う。

「ええ、そうですよ。きっとめぐみさんに会ったら興味を持ってくれると思ったんです。それに、梶さんにもお口添えいただきたくて」

「俺がか？」春樹が私の口を使って言った。

「はい。梶さんが死んで縮小したままだと、僕もちょっとつまらないし、かと言って日本で元に戻すにはもう一人僕と同じぐらいの能力がある人が必要です。でも、香港でなら、ウォンさんが居る」

「そうか・・・。シャオロン、今仕事の方はどうなってるんだ？」春樹が言った。

アンディは目を伏せて、それに答える。「実は、会社は閉めてしまった・・・。それに妻とも離婚したところだ」

私と正巳が顔を見合わせる。アンディが続ける。

「風水師としての仕事だけ、個人的に受けているのが現状だ」

「お前は、稼ぐ必要なんて無いからな」春樹が私の口を使って言う。

「ああ、国の体制が変わって、面白いことが無くなったんだよ」アンディが微かに笑って見せた。

「そうか・・・」

「稼ぐ必要がないって・・・」私は怖々と尋ねる。何故なら、龍の物語の中のリーシャオロンは、大財閥の跡取りなのだ。

「ウォンさんはスターシップ財閥の御曹子なんですよ」正巳が私に言う。

「やっぱり・・・」私は後が続かない。

「父が風水で儲けたんです。でも、僕は金儲けが好きじゃない」

「でも、風水を観たりするのは好きなの？」私が尋ねる。

「はい。僕は、僕の力を金儲けに使いたくないのです。もっと何か面白いことがあるはず」

「だったら、きっとこの旅は面白いことに満ちているわ」

「はい」アンディは大きく肯いて笑って見せた。

「ウォンさん。でも、離婚したって何故ですか？」正巳が興味深そうに尋ねる。

「正巳！そんな立ち入ったことを聞くものじゃないわ」私が慌てて正巳を窘める。

「良いですよ。ちゃんと話しておきましょう。妻が運命の人と出会ってしまったんですよ。それに僕は抗えない。だから別れたんです」

私は大きくため息を付く。「どっかで聞いたような話ねえ」

正巳が笑いながら言う。「だからと言って、僕のめぐみさんに手を出したりしないで下さいよ」

「それはどうかな？運命には抗えないから・・・」アンディも笑いながら言った。

「ねえ、なんだか何処かが欠けた者達の集まりみたいね・・・」私が言った。

「梶は、肉体さえ持っていない」アンディが言う。

「『月は丸くなくても美しい』昔私が書いた物語の中に出て来るセリフよ」

「ロマンティックだ」アンディはそう言って後ろを振り向く。そこには、外灘の世界一口ロマンティックな夜景が広がっていた。

その夜正巳は私の部屋で、夜景を見ながらもう少しお酒を飲んで、私のベッドと一緒に眠ったのだった。

「昨日よりももっと綺麗」アンディが言う。

「それはどうもありがとう」私は首を竦めてそう言った。

正巳はふくれっ面でそんな私とアンディの会話を聞いている。私はまたからかいたくなって正巳に言う。「ほら、大人の男はこうやって女性を口説くのよ」

「どうせ、僕は子供ですから」正巳は思ったとおりの反応を見せた。

「ところで、これから何処へ行くの？」私が尋ねる。

「蘇州に向かいます。でも、周りの風景を注意してして下さい。何か気にかかるものがあったら、すぐに言って」アンディが答えた。

「何が起るのかしら」

「判りません。何かがあるかも知れないし、何も無いかも知れない。でも、必要なことはちゃんと向こうからやって来ます」

私はそれに肯いてみせる。そして、窓の外を流れ去る風景に目をやる。

暫くは、都会の風景だった。それに対して何も感じはしない。

「めぐみ。昨日の女性の霊。あれから何ともなかったですか？」アンディが突然そう言った。

「ええ」私が答える。

「じゃあ、良かった。彼女は、寂しい霊でしたね」

「ウォンさんにはどう見えたんですか？」正巳が尋ねる。

「彼女は、街を彷徨ってたんですよ。日本人を捜して・・・」

「どういう意味？」私が尋ねる。

「聞かない方が良い」アンディが言った。

「そう。そうでしょうね。でも、有りの儘をそのまま観るって辛い事ね・・・」

多分、彼女は娼婦だったのだ。そして、アンディは客を捜して彷徨っていたと言っているのだ

。しかし、私は、身内の立場でその部分が無意識に見なかったのだろう。

その想いを正巳が読む。そして、正巳がアンディに向かって言った。「ちょっと止めて下さい。僕はめぐみさんの隣に移ります」

アンディは肯いて見せてからすぐに車を止めた。正巳は助手席を降りて、私の隣に乗り込む。そして、私の肩に腕を回して言った。「大丈夫です。僕が居るから」

私は微笑んで返す。「私は平気よ。そんな子供じゃないから」

アンディは静かに車を発進させた。正巳は肩に回した腕を降ろして、静かに私の手を握りしめる。そして、彼から譲り受けた指輪にそっと触れた。

「あっ」正巳が小さく声を上げた。

「どうしたの？」私が尋ねる。

「めぐみさん。それ、効力が切れてます」

私は右手を彼の前に広げる。正巳はその手を取って、指輪に触れる。

「どうしてこんな事になってるんだ。これじゃなんの役にも立たない」そう言って私の指からその指輪を外す。

「正巳君。必要なことしか起らない。あなたとアンディがその指輪の代わりにするのよ」

アンディが後ろを覗き込んで尋ねる。「どうしたの？」

「めぐみさんの魂が抜け出すのを押さえるためのお守りが、効力を失っているんです。梶さんが僕にくれた指輪なんですけど、それをめぐみさんのために再チャージして付けて貰っていたんです。昨日まではちゃんと機能していたのに・・・」

「多分、土地の力・・・。周りに気を付けていて下さい」アンディがそう言い終わるか終わらないうちに私の意識が遠くなっていった。

耳元で私を呼ぶ声が聞こえる。「めぐみさん、めぐみさん・・・」

「良かった、めぐみさん。しっかりして下さいよ」正巳が私を覗き込んで笑っていた。

私は身体を起こして周りを見回す。そこは、日本の私の部屋。私は変だと思ってもう一度目を閉じる。「私は今、上海から蘇州に向かっているのだ。自分の部屋にいるはずはない」そう自分自身に言い聞かせる。

私は自分自身を捜していた。今自分のいる場所、そして、自分が生きている世界を。しかし、それはなかなか見付からない。フツシの居る場所、昨日まで自分がいた場所、春樹と一緒にいた場所、そんな場所が次から次へと私を引きずり込む。私は沢山の人に愛されていた。フツシも私を抱きしめてくれていた。そして別れた夫も、昨夜ベッドの中で正巳もしっかりと抱きしめていてくれた。そして、私は生きていた時の春樹の腕の中でも愛を感じていた。沢山の抱きしめられた記憶が私に降り注いでいた。

「ウォンさん、どうすれば良いんですか？」五十嵐正巳が狼狽えている。

「梶はなんて言ってる？」ウォンシャオロンが取り敢えず車を止め、後ろの座席を覗き込むようにして言った。

「ダメです。めぐみさんが此処に居ないから、梶さんと繋がれません」

ウォンシャオロンは首を振って見せると言う。「梶、五十嵐君に降りてくれ」

五十嵐正巳はそれを受けて、心を静める。しかし、いつまで経っても梶春樹は降りてこない。

「どうしたんだ」ウォンシャオロンが呟く。

「ダメです。この状態では降ろせません」五十嵐正巳が情けなさそうに言った。

ウォンシャオロンは静かに深い呼吸を始め、目を閉じて精神を統一する。五十嵐正巳は気を失ったままのめぐみを膝に抱いたまま呆然としていた。

「判りました。すぐ傍に助けてくれる人が居るはずですよ。その人を捜しましょう」精神統一を解いたウォンシャオロンがそう言って辺りを見回す。五十嵐正巳も、すがるような思いで周りを見回すが、自分が何をみつけるべきなのかが判らない。

「エネルギースポットが近くにはないか？」ウォンシャオロンが五十嵐正巳に言う。

「ありました。その道の向こうにエネルギーの柱が見えます」正巳がそう言って左後方を指さす。アンディもそれを見つけて急いで車を発進させた。

「五十嵐君、めぐみは大丈夫？」アンディが運転しながら言う。

「多分……。僕はまだこの人を梶さんに返したくない……」

「五十嵐君、心を落ち着けて。めぐみにはめぐみの人生があるんだ。君はそれに関われない」

「判っています。判っているんですが、僕にはまだそれを認めることが出来ないんです。いつも梶さんやめぐみさんに言われているんですけど……。僕はまだこの人の存在を必要としているんだ。この人は生まれて初めて愛した人なんです……」

「判った。しかし、君は彼女に関われない。それだけは確かなことなんだよ。それを心に沈めて」ウォンシャオロンは冷静に、しかし愛情を込めてそう言った。

「そんなの無理ですよ。僕は僕の命に替えてもこの人を守らないといけないんだ。違う、僕がこの人にどうしても生きていて貰いたいから……」

「大丈夫、彼女は自分の力で戻ってくる。君が言ったんじゃないか、この人は強いって」

ウォンシャオロンはそう言い終わるか終わらないうちに、エネルギースポットに車を付けた。そこは、古い民家。土で出来た壁の至る所が崩れかけて居る。

ウォンシャオロンは車を降りると、その家の中に飛び込むように入った。そして、そこの住人を見つけ、とても早口で何かを告げる。住人は、背筋のしゃんと伸びた老人だった。

その老人は何度も肯きながらウォンシャオロンの話を聞き、最後に大きく肯いて、車の中の五十嵐正巳とめぐみを覗き込む。そして、五十嵐正巳に対して、力強い眼差しで大きく肯いた。

「五十嵐君、めぐみを降ろして。このワンさんが祈禱をしてくれるそうです」ウォンシャオロンが言った。

五十嵐正巳がめぐみの身体を抱えながら車を降りる。ワンと呼ばれた老人が先導して建物に入る。

「五十嵐君。このワンさんは今はこうして隠居のようなことをしているけれど、元々は仏教の修行をなされた方だそうです。それも、空海の流れを引くお寺で育ったとか」

「そうですか」五十嵐正巳はホッとした表情で肯いた。そして、気を失ったままのめぐみを老人の指定した場所に横たえる。

ワン老人は、静かに瞑目し、辺りの空気を揺るがすような声で般若心経を唱え始める。決して声が大きいというのではない、その声に込められた意志の強さのようなものが、周りに広がっていくのだ。五十嵐正巳は、すぐにそれに唱和する。その般若心経は、日本で唱えるものと少し違っているようだが、その違いは五十嵐正巳がそれについて読経することが出来る程度のものでしかなかった。

ワン老人は般若心経の後、いくつかの真言や陀羅尼を唱え、印を結び加持をした後、振り返って五十嵐正巳に何か言った。

「何かに取り憑かれているわけではない。この女性は空っぽと言ってる」ウォンシャオロンがそう訳した。

「空っぽ？」五十嵐正巳が尋ねる。

「そう。何もないと言ってる」

「どうすれば良いんでしょうか？」正巳が尋ねる。

「自分で戻ってこれると良いのだが・・・」アンディが言った。

「判りました。結界を張るように御願ひして下さい。僕が探しに行きます」

アンディが肯くと住職にまた早口で何かを言った。ワン老人はそれを聞いて用意をしに行く。そしてすぐに何本かの竹を持って現れる。それを、周りを取り囲むようにして置いた。

「竹の虚を結界にするのです」アンディが言う。

「はい」正巳がそれに肯く。そして、静かに呼吸を始めた。

私は愛の感情の中を漂っていた。そこは限りなく優しい。そして、全ての痛みと苦しみのない、心地良い場所だった。

ただ、一人で何も思わず、ただ与えられるものだけで満足していた。自分はなんて小さな存在なんだろう。そう感じながらそこに漂い続ける。

「ヨーコ！大丈夫かい？」気づくと、美しい顔をした東洋人の男が私を覗き込んでいた。

「戻った！」そう言って喜ぶ浅黒い肌の色の逞しい男も見えた。

「エディ、アルン・・・」私はその二人の名前を知っていた。

「大丈夫。もう少し休みなさい」エディが私に優しくそう言ってその場を離れた。

私は夢の中に居る。私はそれを自覚していた。此処は「龍」の物語の中。いつか春樹が言ったもう一つの現実だ。私は心の中で春樹に尋ねる。

「春樹、どうなっちゃったのかしら？」しかし、いつものように春樹が答える事はなかった。何処にも春樹を感じる事が出来ない。

私は重い腕を上げて、自分の手を目の前に広げて見る。左手の薬指にダイヤが光っていた。それは自分で買える大きさのものではなかった。そして、右の薬指に指輪は無かった。「大切な指輪がない・・・。私の魂を繋ぎ止めていた指輪が・・・」

私はそう呟いて、そのまま目を閉じて涙を流した。

「ヨーコ、どうしたの？」静かにドアを開けてエディが寝室に入って来て、泣いている私の額に触れて尋ねた。

「私、ヨーコなの？」エディにそう尋ねる。

エディは静かに肯いて見せる。「そうだよ。君は田中ヨーコ、僕の妻だ」

「ヨーコ・・・」自分の名前を確認するように呟いた。そうする事によって自分がヨーコであると言うことが心に沈んで行く。

「エディ、私違う名前で見ている時の夢を見ていたの。悲しいことが沢山あった」

「僕は居た？」優しい声でエディが尋ねる。

私は首を振って見せる。「あなたは居なかった。でも、同じぐらい愛してくれる人達に囲まれていたわ」

「そうか、じゃあ良かった。君はいつも愛されているんだ」

「あなたは、あれが何なのか知っているの？」

「はい。それも夢。これも夢。全てが幻でしかないからね。だけど、僕のヨーコはこうして今僕の腕の中にいる。僕はこの幸せを離しはしないよ」そう言って寝ている私を抱きしめた。

「あなたに殺して貰うまではこのままなのね・・・」私はやはりこの夢の中でも誰かに殺して貰うことを望んでいるのだ。

「大丈夫さ。君は全て上手くやれる。誰も間違ったりしたりしないからね。ほら、君のために紅茶を頼んであげるから、用意できたら出ておいで。アルンも心配してるよ」

「ありがとう」私、ヨーコがそう言って肯いてみせる。

「ヨーコ。君はもう悲しい夢を見ないで良いんだよ。いつも僕と一緒に居さえすれば、君は必ず幸せで居られるんだ」

「そうね。あなたと居れば幸せに死ねるのね」

エディは首を振ってみせる。「辛い夢は忘れなさい」そう言って部屋を出ていった。

ウォンシャオロンと五十嵐正巳が、横たわるめぐみを真ん中に挟んで向かい合っている。

その周りを青竹で取り囲み、その外側にワン老人が静かに座り、読経をしていた。

「五十嵐君。まず君にもう一度梶を降ろしてみよう。そして、それがダメなら、その後でめぐみを降ろしてみるって言うのはどうだろう？」

「僕にめぐみさんをですか？」

「はい。君は彼女を良く知っている。だから、きっと引き寄せることが出来るはずだ」

「ウォンさんが呼んでくれるんですね」

「はい。梶ほど上手く出来るかどうかは判らないが・・・」

「きっと大丈夫です。宜しくお願いします」五十嵐正巳はそう言って安心したように柔らかな表情で頭を下げた。

ウォンシャオロンが、静かに息を吐き、そして暫く止めた後、また静かに息を吐く。そして、座ったまま両腕をゆっくりと回し、気を集める。その間、五十嵐正巳もウォンシャオロンに呼吸を合わせ、「無」の状態に自分を持っていった。

ウォンシャオロンは、自分のエネルギーを霊媒に分け与えながら、霊を降ろす。そのまま降ろすのではなく、自分の気を分け与えながらそれをすることによって、霊媒の消耗を少なくすることが出来るのだ。

「梶春樹。この依代に降り給え」静かな、しかし抗うことを許さないと叫んだ力のある声でウォンシャオロンが言う。

「シャオロンか・・・辛い・・・」

数分後、小さなやっと思き取れるような声で五十嵐正巳に降りた梶春樹が言った。

「梶、どうしたんだ？いったいどうなっているんだ？」

「ダメだ、このままじゃ・・・。五十嵐もシャオロンも・・・」切れ切れの声で五十嵐に降りた梶春樹が言った。

「私と五十嵐君がどうしたって？」額に脂汗を滲ませてウォンシャオロンが言う。

「早く俺を落とせ。このままじゃ二人とも消耗しきってしまう」とうとうと五十嵐の身体が前に倒れ伏す。

「だったらめぐみを降ろせば良いのか？」その倒れた五十嵐を覗き込むようにして尋ねる。

「五十嵐に降ろすのは無理だ。絶対にしてはならない・・・。姉さんは、今この次元に居ない。

俺もついていけなかったんだ・・・」

「次元？」

「ああっ・・・。早く落とせ・・・」五十嵐正巳は胸を搔きむしるようになって苦しんでいた。

「梶春樹。元の場所へ戻りなさい」ウォンシャオロンが言った。

数分後、五十嵐正巳が身体を起し、大きく息をする。

「苦しかった・・・。こんなの初めてです。悪霊を降ろすよりも辛かった」梶春樹の離れた五十嵐正巳が、彼自身の意志で言った。

「私も辛かった。いったい梶は何処にいるんだろう？」ウォンシャオロンも青ざめた顔で、額に浮かんだ脂汗をハンカチで拭いながら言った。

「次元がどうのって言ってましたよね。霊界にいるわけじゃないんだ」

結界の外からワン老人が何か言う。それに対してウォンシャオロンが肯くと、五十嵐に向かって言った。

「結界の中の気が不足していると言っている。危険な状態だ」

五十嵐はそれを聞いてめぐみの頬に触れる。「めぐみさん。いったいどうしちゃったんですか？僕一人置いていったりしないって約束したじゃないですか」

「五十嵐君。梶が君にめぐみを降ろしてはいけないって言ったんだが・・・」

「そうですね。多分、キャパシタンスの問題だと思います。前に、言われたことがあるんですよ。僕のキャパとめぐみさんのキャパは違いすぎるって」

「どう言うこと？」

「めぐみさんは自分で発電するんです。神のエネルギーとダイレクトに繋がれる特殊な形の魂なんだそうです。でも、こうして止まってしまったらもうどうすれば良いのか判らない」

「だったら、めぐみに梶を降ろしてみよう。さっきの感じだと梶は何かを知っている。空っぽの心に梶の心と呼んで、梶にエネルギーを発電させれば何とか成るかも知れない」

「そうですね。梶さんなら出来るかも知れない・・・」

ウォンシャオロンはワン老人に向かって何かを尋ねる。ワン老人はそれに対して、庭の木を指さして答えた。

「五十嵐君。此処の気は、あの木のところが一番強いそうだ。あっちに移動してやり直そうか」

「あの金木犀ですか？」金色の花を付けた木を指さして、五十嵐正巳が言った。

「はい」ウォンシャオロンが肯いた。

「めぐみさんは金木犀が好きだったみたいですから、良いでしょう」

ウォンシャオロンはワン老人に何か言うと、ワン老人はその場を離れた。

「何か敷くものを持ってきてくれるそうだ」ウォンシャオロンが言った。

二人は立ち上がり、五十嵐正巳が気を失ったままのめぐみを抱き上げると、その木の下まで運んだ。むせ返るような強い香りが漂っている。

老人がむしろのようなものを持ってきて、丁寧に何かに頭を下げながら敷く。

良く見ると、そこには丸い天然石が置かれてあった。その石に向かって老人は頭を下げたのだ。

。

ウォンシャオロンがまた何かを尋ねる。すると、老人がそれに答えた。

「此処には、李翠玉と言う女性の霊を鎮めてあるそうです。大昔、金木犀の下で殺された女性ら

しい」

「えっ、この場所ですか？」五十嵐正巳が驚いて尋ねる。それをウォンシャオロンが老人に伝える。

「いいえ、この場所ではないそうです。ずっと遠く、長安、いまの西安ですね、その辺りでの話らしい。でも、此処で生まれた女性だったから、此処に祀ってあるそうです」

「そうですか……。だったら大丈夫ですね」五十嵐正巳はそう言って、老人が用意してくれた場所にめぐみを降ろした。

老人は、六本の竹でまた周りを囲み、結界を張る。

もう一度二人が気を合わせて、精神統一を始めた。そして、二人で意識のないめぐみに梶を降ろす。

「梶春樹。めぐみに降りて」ウォンシャオロンが言う。

「梶さん。めぐみさんに降りて下さい。めぐみさんは梶さんの依り代だったはずですよ。どうか速やかに降りて下さい」五十嵐正巳が言った。

「あ〜あっ」驚くほど大きな声でめぐみに降りた梶春樹が叫んだ。そして、両腕で自分の頭を抱え、もう一度「うあ〜っ」と声を上げる。その声に驚いたように金木犀の花が雨のように降り注いだ。

「梶さん！しっかりして下さい。どうしたんですか？」五十嵐正巳がめぐみの肉体に降りた梶春樹を後ろからしっかりと抱きしめる。その腕を逃れようと梶春樹は必死でもがく。

「梶さん。愛してます」五十嵐正巳はそう言って抱きしめる腕に更に力を込めた。

「御願いです。どうか僕の愛でスターターを回して。めぐみさんを助けて欲しいんです」

ウォンシャオロンはそれを静かに見ていた。そして、何かを思い出したのか、涙を流し始めた。「梶。君がそうだったのか……。そしてめぐみが……」

「うわ〜っ、シャオロン言うな！」梶春樹が叫んだ。そして、抵抗していた力が抜けた。

「梶さん」五十嵐正巳も抱きしめていた腕を解いた。

「五十嵐か。ありがとう。なんとか成ったみたいだぜ。シャオロンもありがとう」そう言って梶春樹の降りためぐみの身体が立ち上がった。そして、そのまま李翠玉の祀られた石に向かって静かに合掌した。

「大丈夫か？」ウォンシャオロンが合掌を終えた梶春樹に言う。

「ああ。もう大丈夫だ。俺は姉さんを愛していた。姉さんも俺を愛していたんだ。ただ、その思いがすれ違い、悲しい結果を何度も何度も呼んだだけさ。しかし、姉さんは俺のように恨みはしなかった。いつも姉さんは俺のために耐え続けていてくれたんだ。それも、愛の形だった」

「そうか……。」そう言ってウォンシャオロンは笑って見せた。

めぐみに降りた梶春樹がそんなウォンシャオロンをしっかりと抱きしめる。

「あ〜っ、梶さん！その身体めぐみさんなんですから……。」五十嵐正巳が抗議する。

「五十嵐。お前もうちょっと心を大きく持てないのか？」梶春樹が笑いながら言った。

「梶さん……。でも、めぐみさんをどうやって呼び戻せば良いんですか？」

「それだなあ……。」そう言って梶春樹は黙り込む。そして、結界の外に出てワン老人に丁寧に礼を言った。ワン老人が何か言ったのをウォンシャオロンに訳して貰う。

「お役に立てて嬉しかったと言ってるよ」ウォンシャオロンが言った。

梶春樹が肯きながら言う。「中国ってなんでこんなに沢山の言葉があるんだ」

「広いんだから仕方ないだろう」ウォンシャオロンが梶春樹に言う。

「広東語だけはなんとか覚えたんだがな」梶春樹が言う。

「此処は主に上海語圏だ。それにこの老人はそれも訛っている」

「まあいい。シャオロンに来て貰って良かったよ。お前は本当に語学の天才だ」

「呪術は言葉だからな」

その後、ワン老人が三人にお茶を振る舞ってくれた。それをありがたく頂き、また車で出発する。

「さて、これからどうしたものか・・・」助手席に座った梶春樹が言った。

「梶さん。早くめぐみさんを連れ戻して下さいよ」後ろの席で五十嵐正巳が言う。

「そうだな、姉さんはどうすれば呼び戻せるんだろうか」

「梶は知らないのか？」ウォンシャオロンが運転しながら言う。

「ああ、こんな経験今までにしたことなんて無いからな」

「次元がどうのってさっき言ってなかったか？」

「ああ、姉さんは次元を越えた。その時に俺は振り落とされてしまったんだ。それまで姉さんのエネルギーで存在していたものだから、五十嵐や、シャオロンが送ってくれるエネルギー量ぐらいいでは追いつかなかった。あのまま五十嵐に降りたままだと、大変なことになるところだったんだぜ」

「梶さんは、普通の霊じゃないって言う事ですか？」五十嵐正巳が尋ねる。

「ああ、神と同じレベルでエネルギーを使えたからな」

「そうか・・・。めぐみさんに寄生している限り、その形でも全然問題がなかったんだ」

「お前も嫌な言い方をするなあ。でも、そう言うことだ。初めのうちは普通の霊と同じだったんだが、姉さんの入れ物に合わせて順応した」

「梶。でも、お前は今女性なんだから、そんなに足を開いて座るものじゃない」ウォンシャオロンがくつろいだ雰囲気の中で座っている梶春樹に注意する。

「おっと、そうだった。私、めぐみです」梶春樹がふざける。

「梶さん！ふざけてないで、御願いですから、早く僕のめぐみさんを連れ戻して下さい」五十嵐正巳が泣きそうな声で懇願した。

「判ってる。俺だって姉さんを失いたくない。姉さんには幸せになって貰わないといけないんだ。でも、多分今姉さんは幸せの中にいると思うぜ。何故なら、彼女はいつも何処にいても幸せであることを誓っているから・・・。もしかしたら、此処に居るよりもずっと幸せな場所で生きているかも知れない」

「でも、僕はめぐみさんと一緒に幸せになりたい」

「お前のその思いから、姉さんは逃げ出したんじゃないのか？」

「僕のせいなんですか！」五十嵐正巳が驚く。

「冗談だよ。そんなに必死になってたら、かえって良いアイデアが浮かばないって思っただけさ」

「アイデアって・・・」

「そう、今まで誰も経験したことがない状態に陥ってるんだ。だから、やり方を探す必要があるんだよ」

「何故、梶さんに貰った指輪の効力が無くなってたんでしょう？」

「んっ？指輪の効力が切れてたって？」梶春樹は驚いたように聞き返す。

「そうなんです。今朝、この車の中で気づいたんです」五十嵐は自分のポケットからそれを取り

だしてめぐみに降りた梶春樹に渡す。

「本当だ」それを受け取った梶春樹が首をひねる。

「多分、それは、土地の力だと思う」ウォンシャオロンが言った。

「土地の力って？」

「日本のような海に囲まれた小さな国に住んでいると判らないかも知れないが、これだけ広い土地に住んでいると良くあることなんだよ。その土地その土地でエネルギーの質が違う。要するに神が違ふと考えても良い。ある土地で善きモノが違ふ土地で悪しきモノに成ってしまったりするようにな」

「でも、めぐみさんはこちらへ来て、何かに影響を受けているようではなかったですよ」

「そうだな。この指輪は、姉さんが望んで抜け出すときには機能しない。そうだったよな」

「はい。そうしておかないと、めぐみさんの自由が束縛されてしまいますから」

「それだ。つまり、その指輪の効力が無くなっていると言うことは、土地の力と言うよりも、姉さん自身がそれを望んでいたからと考えた方が良くないんじゃないか」

「確かに、今のめぐみさんだったら、周りのエネルギーに影響を受けるようなレベルじゃないですからね」

「あんなに普通の女性だったのに、何故君達はそんな風にめぐみを評価するんだい？」

「シャオロンは気づかなかったのか？」

「ウォンさんは昨日会ったばかりですから。僕だって、しばらくの間は判らなかった。と言うよりも、今でも本当は認めたくないんですよ。彼女はただの女性であって、守ってあげないといけない存在なんだって思いたい」

「姉さんはダイレクトに神と繋がっているんだ。全てを知りながら、それを否定も肯定もせず、ただそのまま受け入れている。その為になる心の摩擦を自分で処理しているんだ。それが出来るだけの強さも持っている。しかし、今回は逃げ出したのかも知れないぞ」

「逃げ出せる力を持っているということか？」ウォンシャオロンが驚いて言う。

「今の状態を有りの儘に認めるとそう言うことにならないか？」

「もしそうなら、それは確かに凄いことだ」

「ところでシャオロン、タイロンから何か言われてないか？」

「パーパは、紅い龍が海を渡ると言った。美しいから見て来いと」

「そうか……。それだけじゃ良く判らないな……。パーパももう少し判るように言ってくれと良いんだが」

「仕方ないさ。パーパにはそれで充分なんだろう？」

「そう言うことだな。赤い龍か……。まるで血に染まった龍と言うようだな。それが海を渡る。そして美しいから……。そうか！」

「どうしたんですか？何か判りましたか？」五十嵐正巳が尋ねる。

「姉さんが書いている龍の物語だ。まだ出来上がっては居ないが、確か最後の部分にエディが怪我をして血に染まる場所があった。そして、タイロン号が横浜に着いたところで終わっていた……」

「それがどうしたって言うんですか？ただの偶然の一致でしかないじゃないですか」

「そうさ。それが馬鹿みたいに重なっているんだよ。シャオロンの存在もタイロンの存在も、そして、何よりも姉さんは龍を連れている……」

「それは龍を連れためぐみさんが物語を書いているからじゃないですか」

「五十嵐、姉さんに龍は見えなかったんだよ。そして、姉さんの物語は十年も前に書き始められ

た物なんだ。お前もフツシに会っただろう？」

「フツシの出て来るあの物語ですか？」

「ああそうだ。姉さんは馬鹿みたいなスケールで物語を書いていたんだ。場所だけじゃない、時間も越えていた。そして、その『時』の場面でその物語は止まっていたんだよ」

「で、どうすれば良いんですか？」

「判らん。しかし、姉さんが何かを見つけてくるまで待つしかないのかも知れない。だけど問題が『時』なんだったら、そんなに長く待つ必要はないだろう」

「また、梶さんはいい加減なんだから・・・」

「そんな春樹が好きなのよ」

「めぐみさん！」

「バーカ！俺だよ」

「梶、お前は相変わらず冗談が好きだなあ」ウォンシャオロンが呆れたように言った。

「お前達も一度死んでみると良いぜ。心配する必要なんて何もないって言うことが良く判るから。と言うよりも、人が心配することによってどれだけのエネルギーを浪費しているのかが良く判る」

「そうか、お前は死んでいるんだな」ウォンシャオロンがしみじみとした口調で言った。

「ああ。今は姉さんの身体を借りているけどな。まあ、姉さんが留守の間、俺が留守番しているって言う感じだ」

「帰って来るんですよねえ」五十嵐正巳が言う。

「ああ、帰ってこないんだったら、身体を置いていったりしないだろう？」

「でも・・・」

「心配するな。姉さんは自分が神だということをちゃんと知っている」

「なあ、姉さん。姉さんはいったい誰なんだ？」

「誰って、私は私」

「そうか、姉さんは姉さんなのか」

「じゃあ、あなたは誰？」

「俺か？俺は梶春樹だよ」

「そう、あなたは春樹なのね。でも、私はなんて言う名前なんだろう？」

「そうだな。姉さんの名前……。好きな名前で生きていれば？」

「でも、私、伊藤めぐみの身体を置いて来ちゃったのよね。あれは失敗だったかも知れない」

「俺が預かってる」

「そう……。正巳が心配してたでしょう？」

「ああ、アイツは泣きそうだったぜ」

「やっぱり。でも、どうしてこんな事になっちゃったのかしら？」

「みんな意識してないだけで、こんな事日常茶飯事で起きてる」

「まさか？」

「俺も、さっきまで気づかなかったんだが、よく考えてみれば、時の狭間がちょっと膨らんだだけなんじゃないか？」

「時の狭間……。なるほどね。そうかも知れない。普通は一瞬にも満たない長さで色んなところと繋がっているのよね。それに気づかなければ問題なんて何も起らない。だけど、ちょっとこれは長すぎるかも……」

「まあ、良いじゃないか。俺が姉さんの肉体を着て、それなりに生きていてやるよ」

「でも、私このままじゃやっぱりまずいと思うな」

「それはそうだよ。伊藤めぐみとして生きて行く上では、かなりヤバイ状態だ」

「そのわりにはあなたのんきにしてるわね」

「ああ、必要のないことは起らない。つまり、これも必要があって起っているんだろう？」

「それはそうでしょう。でも、なんだか私も随分軽くなったわ。やっぱり肉体を持たないって、素敵ね」

「元々みんな持っていないんだがな」

「そう、全てが幻。だけど、名前を持つことでその名前に縛られる」

「そう言う事さ。だから、姉さんも好きな名前で生きているところに焦点を当てればいいじゃないか」

「それがもし、伊藤めぐみじゃなかったら？」

「それも一つの在り方だ」

「伊藤めぐみはこのままフリーズしてしまうの？」

「そうだな。でも、動き始めたらそのフリーズしている期間は無きに等しい」

「判った。今私は伊藤めぐみとして春樹や正巳と共に存在している。そして、田中ヨーコとしてもエディと共に存在している」

「ああ、そうだ。そしてそのどちらでもない姉さんだって存在している」

「そうね。春樹だって正巳だってやっぱりそう」

「それに気づけば次ぎに進めるさ」

「ありがとう。でも、私此処からどう動き始めよう？」

「姉さんの思うように・・・」

私は大きく伸びをして目を開けた。

「おはよう」正巳が元気な声で言った。

「あなた早起きだったのね」私は毛布をかき寄せて、少し照れながら言う。

「今起きたところですよ」窓の前でちゃんと身繕いを整えた正巳が言った。

「お天気はどう？」

正巳が振り向いて窓の外を見ながら言う。「とっても良い天気です」

「何時？」

「七時半ですよ。早く用意しないとウォンさんとの約束に遅れちゃいます」

「何時の約束だったっけ？」

「八時に下のレストランで朝食を一緒に食べてから出発です。今日は蘇州まで行くんだから、ちょっと早めに出ないと」

「そうね。急いで用意するわ」

「そうして下さい。僕も自分の部屋に戻って用意します」

正巳はそう言ってドアに向かう。そして、振り向いて言った。「素敵でしたよ」

私も微笑んで言う。「あなたこそ」

正巳が少し表情を引き締めて言う。「でも、春樹って呼ぶのやめて貰えませんか？」

「えっ！嘘・・・。ごめんなさい」

「冗談です。ちゃんと僕の名前を呼んでました」そう言って悪戯っぽく笑ってドアを出て行った。私は正巳が立っていた場所に枕を投げつける。「正巳の馬鹿！」

私がレストランへ降りた時、アンディと正巳はお皿一杯に料理を取って席に着くところだった。私も彼らの席に案内して貰い、紅茶を頼んでから、そこに荷物を置いてバイキング方式の料理を取りに行く。

パンを2種類と、ベーコンエッグ、それにフルーツとヨーグルトを持って席に戻った。

私はそれらを食べながら言う。「私、凄く変な夢を見たの」

アンディが首を傾げて見せる。

「今日、蘇州に向かう車の中で、私が気を失ってしまうのよ。そして、その私の身体に、あなた達が二人がかりで春樹を降ろしたの。そう、途中で昔密教の修行をした老人に助けられたりした・・・」

「それでどうなったの？」アンディがカップに残ったコーヒーを飲み干して言った。

「どうにも成らない・・・。そのまま春樹が私の身体を留守番していたわ。そう、確かあなたは『紅い龍が海を渡った。美しいから見に行け』って言われたとか・・・」

「誰に？」アンディが睨み付けるようにしっかりと私を見据えて言う。

「そんな怖い目で見ないでよ。私の夢の話なんだから・・・。えっと、タイロンがそう言ったって事だったと思うな」

「その通りだよ。タイロン、私の父がそう言ったんだ」そう言って大きくため息をつき、背もたれに体を預ける。

「そう・・・。正巳はどう思う？」私は正巳の方へ目をやって尋ねた。

「金木犀の木の下で、梶さんが苦しんでいたんでしょう？」正巳は口に入れかけたパンを手に持って、普通の様子で言った。

「あなたも見たのね」私は大きくため息をつく。

「ええ。でも大丈夫。めぐみさんの指輪、まだ機能していますから」そう言って手に持っていたパンを頬張った。

「アンディは？あなたは夢を見なかった？」

アンディは首を振る。

「良かった。やっぱり夢は夢よね」

「そうとは限らない」アンディが言う。

「どう言うこと？同じ事が起るって言うの？」私が尋ねる。

「そうではない。実際に起るべき事を夢の中で体験してしまったんだ。それが必要な者だけね」そう言ってポットを持ったボーイに手を挙げて合図する。。

私は正巳に向かって言う。「あなたその夢から何か学べた？」

正巳は笑いながら答える。「めぐみさんと一緒にいれば、学ぶことだらけですよ。夢の中まで教えに来たりしないで下さい。でも、梶さんがただの霊じゃないって言う事にはびっくりしたなあ」

「ただの霊じゃないって？」アンディはコーヒーを注いでくれたボーイに微笑んでみせると、そのまま正巳に目を戻して尋ねる。

「梶さんは神と同じ状態になっています。めぐみさんと繋がっているから特殊化したらしい。それで、僕達だけでは降ろせなかった。そう言えば、それって大きな教訓かも知れない・・・」

「どう言うことよ」口の中の物を飲み下して私が言う。

「これからも、霊降ろしをしていくために、そういう特殊な霊の存在を知っておくことは大切ですから」

「あら、ちゃんと社長業に役立ててるのね」私が茶化す。

「はい。万が一にも事故は起こす訳にはいきませんから」

「宜しい。誉めて遣わそう」私がふざけて言った。

「めぐみさん、その僕をからかって遊ぶの、何とか成りませんか？」正巳がふくれっ面で言う。

「あらっ？今朝の仕返しよ。私本当に心臓が止まるぐらいショックだったんだから」

「えっ？あ～ああれですか・・・」そう言ってどんな怒りをも解いてしまうような笑顔で素敵に笑って見せた。

私達は食事を終えてアンディの運転する車に乗って出発した。

上海の朝の街は、沢山の自転車が暴走族のように突っ込んでくる。交差点ごとに交通整理の人が居るのだが、ちょっと目を離すと信号など気にしないで、自転車も人も、車さえ自分の思ったように進む。それを交通整理員は、ホイッスルを吹いて制止するのだ。

人々の活気が街に満ちあふれていた。そんな中香港から来たアンディは少し運転し辛そうに大きな車体を操っていた。

正巳は「夢と違う様に乗りましょう」と言って、後ろの席、私の隣に乗り込んでいる。夢の中では確か正巳が私の右側に途中で移ったのだ。しかし、それと違えるために、正巳は私の左側に初めから乗り込み、もう一度私の指輪を確認した。

「めぐみさん。此処に居て下さいよ。めぐみさんが抜け出すことを望んだら、その指輪、なんの役にも立たないんですから」私はそれに頷いて見せた。

街の中心を抜け出し、運転が少し楽になったのかアンディが尋ねる。

「さっき言った指輪って何？」

「梶さんが・・・」正巳が説明しかけるのを止め、私はその指輪を外してアンディに差し出して見せながら言う。

「これ、春樹の形見の指輪なの。正巳から私が譲り受けたのよ。この指輪で突然私の魂が抜けてしまうのを押さえてあるんですって。けど私にはそんなのどうでも良いことなの。この指輪だけが私にとって春樹が生きていたって言うことの証。だって、アイツって生前に、物として残らないもの、そして役に立たない物しか私にくれなかったのよ。だからこの指輪はとっても大切なものの」言い終わって私はまたその指輪を指につけた。

正巳がそれを聞いて私の頭を掴む。私はそのまま首を竦めて言う。「またそれをする」

「良いじゃないですか、梶さんの代わりですよ」正巳が笑って言った。

「そう言われるのを自分が一番嫌がっているくせに・・・。男同士の愛って言うのも複雑なのかもね」

「めぐみさん！」正巳が抗議の意味を目一杯込めて私の名を呼んだ。

私は首を竦めて見せる。アンディが優しそうな目でそんな二人の様子を見ているのがルームミラーに映って見えた。そんな彼に私も微笑んで返す。

「昨日よりもっと綺麗」夢と同じセリフだった。

正巳がそれを受けて言う。「めぐみさんはいつも綺麗なんですよ」

私はそれを聞いて上着の前をかき合わせて言う。「寒～！」

正巳が私の方を見て言った。「これで良いんでしょう？」

私も答える。「此処までは完璧ね」

「夢違え」アンディが呟くように言った。

「そうよ。悪い夢を良い夢に変える。でも、昨夜の夢って私にとってはそんなに悪い夢じゃなかった。だって私はエディの元で目覚めたんですもの」

「エディって？」アンディが問う。

「香港の大財閥、と言うよりもそれを越えたナーガラージャという組織の長である李聖龍の妻として生きている世界で目覚めていたの。李聖龍と言う名前は、ナーガラージャという組織の長になって継いだもので、元は李小龍、エディリーと呼ばれていたの」

「シャオロン、僕と同じ名前なんだね。ところでナーガラージャって？」

「虐げられ、貶められた龍神を奉る組織よ」

「本当にそんな組織があるのかい？」

「あるわけ無いじゃないの。私の空想よ。でもね、ナーガラージャって豪華客船を二隻も持っているのよ。その内一艘はタイロン号って言って、戦争になっても耐えられるんだから。世界各国に専用のホテルがあって、美術館やカジノや、軍隊みたいな物まで持ってる。そんな組織の長である聖龍に愛されているの。春樹なんかよりもっと強くね。今こっちの世界に戻ってきてるのが悔しいぐらいよ」

「めぐみさん。良くそれだけのお金持ちを考えつきましたね」正巳が呆れ半分に言った。

「そうでもないさ。多分、君達が知らないだけで、香港には居ると思うよ」アンディが言う。

「ねえ、アンディ。もしあなたの友人にそんな大金持ちが居たとしても、私に紹介なんてしないでね」

「どうして？」ルームミラーの中でアンディが不思議そうな顔をして私を見る。

「堅苦しいのって苦手なの。それに、私これ以上強く愛されたら、身体が持たないわ」

「それは勿体ない！そんなに遠慮深い女性が現在も存在しているなんて奇跡だね」アンディが大げさに驚いて見せた。

「あなた、春樹が私をどれだけ愛したか知ってる？」

「梶のことだからだいたい想像は付くけど・・・」

「死んでまでも私を殺そうって思うぐらいよ」

「どうやって？」アンディは、一瞬驚いて見せ、その後声を抑えて尋ねた。

「僕に降りて、めぐみさんを殺すんですって。他の誰にも殺させないって言うんですよ。そんな愛って信じられますか？」正巳が投げやりに言う。

「梶って、昔から変な奴だったから・・・」

「変な奴で悪かったな」私の口を使って春樹が言った。

「あら、春樹おはよう」私が春樹に向かって言う。

「姉さん達の話、結構面白かったぜ。もうちょっと黙って聞いていたかったんだが、そろそろ問題の場所じゃないかって思ってな」そう言って窓の外を見ながら続ける。

「五十嵐、この辺りに見覚えはないか？」車は少し埃っぽい市街地を走っていた。

「もう少し先だと思えます」正巳が答える。

「何をやる気なんだ？」アンディが速度を緩めて尋ねる。

「シャオロン、悪いけどちょっと手伝ってくれ。済ませてしまわなければならない事があるんだ」

「何をやる？」アンディがもう一度尋ねる。

「まあ、自分の墓参りみたいなものだな」春樹が答えた。

「あなた、また私をそれに付き合わせるの？」私が春樹に向かって言う。

「姉さんは俺の墓参り、二回目、いや二人目か・・・。でも、今度のは姉さんにも是非参って貰いたい」出雲で姉弟だった時の墓参りを一緒にしたことがあるのだ。

「それもそうね・・・。でも、あなた大丈夫なの？」

「ああ、痛みと苦しみはもう終わってる」

「じゃあ残っているのは恨みだけね」

春樹はそれに答えなかった。

「そう言えば私、春樹のお墓参りに行ってないわ。一度行ってみようかしら？」

「姉さん、やめてくれ。そこで妻と鉢合わせでもしたら・・・」

「そうねえ、弟兼恋人代理がお世話になりましたって挨拶でもしようかしら」私が笑いながら言う。

「頼むよ～」春樹がふざけた声で言った。

「梶さん、そろそろですよ。ほら、左手前方にエネルギーの柱が見えます。ウォンさん、あの辺りに車を付けてくれませんか？」

「判った」アンディがそう言って少し行ったところを左折し、そして夢で見たのと同じ、崩れかけた塀のある家の前に車を止めた。

春樹が言う。「シャオロン、悪いが此処の爺さんに『李翠玉』と言う人の墓を参らせてくれって言ってくれないか？多分、王と言う爺さんだと思う」

「判った」アンディは車を降りて家の中に入って行く。

「春樹、本当に大丈夫なの？」私が尋ねる。

「大丈夫さ。五十嵐は姉さんをしっかり抱いていてくれよ。突然倒れたりしたら大変だからな」
「でも、梶さん、夢の中の事が何故……。それに、どうして僕とめぐみさんが同じ夢を見たんでしょう？」

「一緒に寝てたからだろう？同じベッドにシャオロンも居たら、アイツも同じ夢を見てたかもな。シャオロンにとっても意味のある夢だったんだ。だけど、アイツの意識はそれを捉えなかった。まだシャオロンはお前達と完全に繋がっていないんだ。それだけの事さ」

「じゃあ、僕とめぐみさんは繋がっているって言う事ですね」

「ああ、俺というコードを介して繋がった」

「まだ梶さんが必要なんですね……」

「その内必要なくなるさ。お前と姉さんが完全に愛し合いさえすれば、俺はお役ご免だよ」

「僕には出来ても、めぐみさんには出来ないでしょうね……」そう言って少し悲しそうな顔で私を見た。

「良いじゃないの。コードがあっても無くっても、繋がっていることには変わらないんだし」私がそう言ってごまかす。

「ほら、お前も姉さんを見習って、もうちょっと脳天気生きろ」

「酷い言い方」私が言った。

正巳は黙って私の身体を引き寄せて、力一杯抱きしめた。

「痛いてば！」私は彼の腕の中でそう言う。

「俺は鬼だ！食っちゃまうぞ」正巳もふざけて言う。

「多分、今朝食べたものより、まずいと思うわ。此処まで来て、どうせ食べるのならショウロンパオか上海ガニよ」

「めぐみさん、もしかして怖いんじゃないですか？」

「どうして？」

「めぐみさんって怖いときに良くふざけるでしょう？」

「そうね……。あなたをからかったり、ふざけたりして怖さを紛らわせるのよ。と言うことは、あなたももしかして怖いのか？」

「ええ、僕も怖いですよ。だって、何が起こるか分からないし、昨夜の夢では最悪の状態だったんですから。でも、幸せな場所で目覚めためぐみさんは、いったい何を怖れているんですか？」

「多分、名前を失うこと……」

正巳は暫く考え込む。そして、恐る恐る尋ねた。「伊藤めぐみを捨てる気ですか？」

「いいえ、そうじゃない……と思う……。私も良く判らないのよ。それに、春樹はまだ恨みを乗り越えていない……。何が起ってもおかしくない状態よ」

「念のためにそのエディに愛されているめぐみさんの名前、教えて貰えませんか？」

「ヨーコ、田中ヨーコって言うのよ。でもどうして？」

「最悪の場合、名前の呪術が使えるかも知れませんか」

「まさか？だって私の物語の中の人物よ。私が適当に付けた名前」

「日本に帰ったら僕にもその物語を読ませて貰えませんか？」

「どうして？」

「めぐみさんが考えついた、けた外れのお金持ちって言うのに興味があるんです。それを手本に僕も稼がなきゃ」

私は首を振って言う。「無理よ。働いて手に入れられるスケールじゃないもの。それに、あの物語を読むって言うことは、あなたも私のもう一つの現実に関与するって言う事なのよ。春樹

が言ったの。あれはカバーのない私そのものだって・・・」

「僕じゃダメなんですね・・・」

その時アンディが戻ってきた。

「参らせてくれるよ」

私と正巳は車を降りる。そして、アンディについて門を潜る。途端に金木犀の香りがした。

「ああ・・・」私が立ち止まって声を漏らす。

正巳は私の腰にしっかりと腕を回して支えた。「めぐみさん、しっかりして」

私は肯いて見せ、もう一度大きく金木犀の香りを吸い込む。そして、春樹に言う。

「どう？」

「ああ、やっと此処まで来たな。また姉さんに辛い思いをさせてしまった」春樹が正巳の口を借りてそう言った。

私はそれに対して首を振って見せてから、夢で見た金木犀の木の下に在る小さな丸い石に向かって歩いた。そして、その前に跪き、両手をしっかり合わせる。

正巳も同じように跪き、般若心経を唱えてくれた。

突然私は肩を捕まれて振り返る。そこには恐ろしい形相をしたアンディが立っていた。

「君が・・・、めぐみがこんな・・・」

私は立ち上がってアンディと目を合わせる。アンディの目には、強い怒りと怯えが見て取れた。

「そうよ。私が彼女をこんな目に遭わせたの。そして、その彼女が春樹よ」私は出来るだけ感情を抑えて言った。

「君は、君という人間は・・・」アンディは怒りのために次の言葉が出ない。

私はそんな彼に微笑んでみせる。彼の怒りは当然で、そこに怯えが同居していることが彼の弱さを表しているようで、愛おしく思ったのだ。

「あなたには許せないのね。でも、私はもう許したのよ。そんな事をしてしまった自分をね。まずそこから始めなければ、次ぎに進めないの」

アンディの怒りは殺意にまで達しようとしていた。それを感じて私が言う。

「あなたが私を殺してくれるの？でもその権利を春樹があなたに渡すかしら？私はどっちでも良いわ。誰かが私を殺してくれるのをずっと待っているんだもの」

正巳が読経を終えて立ち上がる。そして、怒りに震えるアンディに向かって言う。

「ウォンさんには無理ですよ。幾ら怒ってもめぐみさんには通じません。それがめぐみさんの強さなんです。此処に祀られている人と、梶さんやめぐみさんとの関係は、僕には判らないけど、そこに何があろうと、愛だったんですよ。梶さんとめぐみさんの間には、いつも色んな形の愛があったんです」

「愛・・・」アンディがそう呟く。

私は自分の内にいる春樹に向かって言う。「アンディが私を殺してくれそうよ。あなたどうする？」

「だったら俺をシャオロンに降ろしてくれ。シャオロン、俺の依り代になってくれるか？」春樹は正巳の口を使って言った。

「お前が殺して恨みを晴らすのか？」アンディが正巳に重なる春樹に向かって言った。

「恨みを晴らす訳じゃない。恨みなんて言うものは、相手を殺しても晴れたりなんてしないからな。俺はそうすることによって五十嵐から姉さんを取り戻すんだ。これ以上姉さんに、苦しみ

の中の幸せを見つけさせるのは、あまりにも可愛そうだ」

「梶さん……。僕は梶さんと戦ってでもめぐみさんを守りますよ。その覚悟は決めてあるんです。だから、そんなに簡単に僕からめぐみさんを取り戻せはしません」正巳が自分自身の意志で言う。

「お前と戦うのか……。それも一つの在り方かも知れないな」今度は春樹の意志で正巳が言った。

「ねえ、私はあなた達が戦うのを見るぐらいだったら、自殺するわよ。今までこうして生きてることが間違いだったのかも知れないんだから。自殺できないだったら、どっちもから逃げ出すわ。正巳からは物理的に逃げ出せば良いだけだし、春樹から逃げ出すのは、春樹の言葉を無視してしまえば良いだけ。そうすればその内精神を病んで、死んでしまえる。どっちにしても私が生きているのが間違いなのよ。私、死ぬってそんなに嫌いじゃないのよね……。むしろ好きよ……。だからアンディ、遠慮する事なんて無いわ。私が名前の呪術であなたに春樹を降ろせばいいのよね。でも、ちょっとだけ待ってくれるかしら？ やってしまいたいことがあるから」

「めぐみ……」アンディが辛うじてそう言った。

私はもう一度李翠玉のお墓に向かって手を合わせる。『愛しい人、何度も何度も生まれ変わり死に変わって愛し合った人』心の中でその愛の暖かさを充分に感じた。そして、もう一度振り返って、王老人を探す。老人は、少し離れたところで神のような目をして私達を見ていた。神のような目。それは、力強く澄んでいて、全てのものを有りの儘に見る事が出来る。そんな目だ。

私は静かに彼の前まで進み出て、そこで跪いてその老人の手を取る。そして「ありがとう」と心から言った。その言葉が老人に通じたのかどうかは判らないが、老人は、私の手の中から自分の手を取り戻すと、その手で私の頭を包み込むようにしてゆっくりと揺すった。そうしてからもう一度私の両手を取ると、そっと引き上げて立たせ、言葉をくれた。

それを後ろでアンディが訳してくれた。

「私はただ、昔から祀られていたものを祀り続けているだけだ。此処に祀られている女性は、本当に美しい方だったと聞いている。きっとあなたのような女性だったのでしょう」

私はそれに首を横に振る。アンディが続きを訳す。

「私は昨夜夢を見ました。あなた達が尋ねてくる夢でした。あなた達は、此処で霊降ろしをし、私もそれを手伝った」

私はそれに肯いてみせる。老人が続けた。

「私の祖先は、日本人です。空海に遅れる事十年余りでこの国に渡り、とうとう帰れなかったのです。しかし、もう千年以上も前のことです。もっと昔には、みんな同じ民族だったかも知れません。私は前の戦争で遠い祖先の国と戦った。そして、それは師と仰ぐ空海の国でもあった。なのに私は戦ったのです」

アンディが訳すのを聞いてから私は言う。

「心を乱してしまって申し訳在りません。でも、王さんのお陰で、とても助かりました。本当に有り難う御座います」アンディがまた私の言葉を訳してくれた。そして、また老人が口を開いた。

「必要なことは必要な時にやってきます。私も、そろそろ仏の元へ行くのに、あの戦争の時の傷を癒す必要があったのでしょうか。私は僧侶でありながら何人もの日本兵を撃った。人の命を奪ってしまったのです。そのことに対してとても大きな心の傷があった。だから、戦争の後、僧に戻ることは望まなかった。ただ、一般人民として此処に暮らし、この場所に祀り続けられていた李翠玉の墓を守っていただけです。しかし、こうして日本人のあなた達を助けることによって、そ

の傷が少し癒えたように思います」

私は、その老人の背負う歴史の重さに涙が込み上げてくるのを感じた。たった数十年生きていてだけで、これ程の傷を負うのだ。何百年、何千年の魂の歴史の中で人はどれほどの傷を負うのだろう。気が遠くなるほどの辛さ。その辛さをカバーして余りあるほど、愛とは、互いに愛し合う事とは素晴らしいことなのだろうか？だから神はそれを望み個に別れた人を生み出し続けているのだろうか？いや、神が個に別れて生まれ続けてるというのか？

私はそんな思いを振り払うようにして老人に言う。

「そうだったのですか。私は昨日、戦時中にこちらで死んだ祖母の霊に出会いました。もし良かったら、祖母のために読経をしていただけませんか？」

老人は、アンディにそれを訳して貰って大きく肯き微笑んだ。そして、祖母の名前を尋ねる。私はそれに「伊藤すず」と答えた。

老人はもう一度大きく肯き、石の前に進み出ると、張りのある声で読経を始めた。

私達三人もその後ろで手を合わせ彼女の冥福を祈った。

夢の中でと同じように、その後老人は私達にお茶を振る舞ってくれ、私達はそれを頂いてからまた車で蘇州に向かった。

「さあ、アンディ、どこかに止めてあなたに春樹を降ろしましょう。私、祖母の供養も終わったし、思い残す事なんて何もないわ」黙って運転するアンディに向かって私が言った。

「めぐみさん、本気ですか？」正巳が驚いたように言った。

私は正巳の目をしっかり見据えて答える。「もちろんよ。アンディの怒りはまだ治まっていない。それに、私のしたことは自分で許せても、他人に許して貰えるようなものじゃなかったのよ」

「僕は嫌ですよ。相手がウォンさんであろうと、梶さんであろうと、絶対にめぐみさんを殺させたりはしない。前世の罪がどうだって言うんですか。死んでしまった後にその罪は残ったりしないんでしょう？」

私はそれに対して首を振って見せてから言う。「もちろんよ。肉体を持たない魂に、恨みも憎しみも無いわ。でも、アンディの感情はアンディのものでしかない。今のアンディが今の私を殺したいほど憎んでいるのよ。それにあなたは関われない」

「だったら、めぐみさんは身に覚えのない罪で裁かれるつもりですか？」正巳がだだっ子のように言った。

「身に覚えなら在るわよ。私が皇帝だった時に、とても美しい妻だった春樹を、金木犀の根元に生き埋めにして、生きたまま目を抉り、そのまま放置して殺したのよ。李翠玉、その名の通り翡翠のように美しい瞳の女性だった。その女性が、若い学生だった男と密通したの。私にはどうしても許せなかった。あの美しい瞳が、私以外の男を見たのかと思っただけで狂ってしまったのよ。そして、その学生だったのが・・・」

「めぐみ。君は言わなくて良い。それが僕だったんだよ。それで、どうしようもない恨みが体の中から沸き上がって来るんだ」アンディが前を向いたままそう言った。

「だったら、ウォンさんだって悪いんじゃないですか！あなたが皇帝の妻李翠玉を、そこまで追い込んだんだ」正巳が言う。

「正巳。それが愛なのよ。後先考えない情熱。そして、恋慕の情。それを皇帝だった私は一番酷いやり方で終わらせたの・・・。恨まれて当たり前だわ」

「だったら梶さんは？梶さんはどう思っているんですか？」正巳が私の奥に向かってそう問いかけた。

「俺は、姉さんを愛してる。それだけだよ」春樹が私の口を使ってそう言った。

「だったら、翠玉はウォンさんだった学生を愛していなかったんですか？」正巳が問いつめる。

「それを俺に聞いて、お前は どうするつもりなんだ」春樹が言う。

「僕には、まだ愛が判らないんですよ。梶さんとめぐみさんを見ていると、判りそうになってもすぐにもっと判らなくなる。それを知りたいんです・・・」

「正巳、あなたの愛は、あなたの中にしかないわ。私と春樹の愛は、私と春樹だけのものだったのよ。それを理解するのは無理。いいえ、そんな事をする必要なんて無いの」

「でもめぐみさん。僕、何にも判らないままめぐみさんを殺されるのも嫌だし、梶さんやウォンさんと戦うのも嫌です」

「五十嵐君。もう良いよ。僕はめぐみを殺したりしない。感情的になって悪かった。あれは忘れてくれ」車を道端に寄せて止め、後ろを振り向いてアンディがそう言った。

私はそんな彼に向かって言う。「だったら、殺したくなったらまたすぐに言ってくれる？気が変わらないうちに、春樹を降ろして上げるから」

「めぐみさん！」正巳が大きな声で窘める。

私は首を竦めてから言う。「恐いわねえ。私、誰かに殺されることより、正巳に叱られる方が苦手よ」

アンディがやっと本当の微笑みを浮かべ、身を乗り出すようにして手を伸ばして私の頭を掴む。私は目を点にして言う。「どうしてあなたまでそれをするの？」

アンディは笑いながらまた前を向いて発車させてから独り言のように言う。

「梶。確かに、少しだけ愛おしい感じがしたよ」

「めぐみさん、お疲れさまでした」

帰りの飛行機に乗り込んだ正巳が改めて言った。

「こちらこそ。あなたのお仕事の役に立てたかしら？なんだかまた邪魔をしてしまったような気がするわねえ」

「多分大丈夫だと思いますよ。ウォンさんはきっと手伝ってくれます。帰ってからもう一押ししてみます」

「そう。でも、奇妙な旅だったわねえ」

「めぐみさんと居るとどうしてああ言う変なことに巻き込まれちゃうんでしょうね」

「それはあなたのせいでしょう？あなたが呼んでいるのよ」

「僕がですか？」

「ええ、そうよ。でも、上海も蘇州も素敵なおところだったわね。近未来的な街もあれば、ちょっと前の日本の姿も、その上蘇州では何千年も前の街も見られたのよ」

「今度はバカンスで来ましょうね」

「あなたとはもう嫌よ。あなたは恋人と行くべきだわ。私も恋人と、ロマンチックな旅行をしたい」

「ロマンチックか、めぐみさんには無理でしょうね」正巳が笑いながら言った。

「どうして？」

「だって、一緒に旅をしている恋人が、突然見えないものと喋り始めたり、何かに取り憑かれたりするんですよ。僕以外の男じゃ精神的に耐えられないと思うけど……」

「あなたねえ。あなたが傍にいないければ、あんなことになんて成らないのよ。それに、恋人と一緒にだったら、春樹だって用無しだし。急に喋り出すこともないでしょう？」

「だったら良いですけど。でも、ウォンさんもめぐみさんのこと気に入ったみたいだったしなあ……」

「まさか？彼は私を殺したい程憎んでいたのよ。それにその憎しみはまだ終わっていないわ。私、あなたの仕事の邪魔をしたみたいでちょっと心苦しい……。私のせいで彼が仕事を引き受けてくれないんじゃないかって……」

「めぐみさん。あなたって何でも判っているようなのに、突然抜けてるところがあるんですね」

「どう言うこと？」

「愛と憎しみは表裏ですよ。それに、梶さんとウォンさんは特別な関係でした。梶さんがあれ程めぐみさんを愛しているのを知って、ウォンさんも心を動かさないはずがない」

「良く判らないわねえ……」

「判らないで良いですよ。僕、今度の旅の至る所に『幸せの記憶』ってタイトルを付けておきますね。少なくとも三日間は僕達恋人同士だったんですから」

「そんなものかしら？でも、確かにとても楽しかったわ。蘇州で船に乗ったのも、あの美しい公園を散歩したのも、それと美味しいものも沢山食べられたし……」

「隣には僕も居た」正巳が私の顔を覗き込むようにして笑う。

「アンディも居たわよ」私がすました顔で言い返す。

正巳は少しがっかりしたような顔で言う。「めぐみさんは美味しいお茶も沢山買ったんでしょう？」

「ええ、突然の来訪者を迎えるためにね」

「それって僕のことですか？」

「あなただけとは限らないけど……。あなたも含めてよ」

「でも、そのほかには何も買わなかったんですね」

「私、あんまり欲しい物って無かったから。でも……」

「でもどうしたんですか？」

「実は、こんな物を貰ったの」私はそう言ってバッグの中から包みを出す。

正巳はそれを受け取って、包みを開く。「これは……」

「アンディに貰ったの。でも、なんだか高そうなものだし、申し訳なくって……」

「めぐみさん。これ、翡翠ですよ。それもかなり良いものです」

「そうなのよ。『魔よけになるから、持っていないさい』って言ってくれたの……。中を見ないでありがとうって貰ったんだけど、後で見てびっくり」

「ウォンさん……。まあお金持ちのすることですから……。でも、ちょっと待って下さいよ。これ、何処かで……」

「それ、俺がシャオロンに渡したものだよ」春樹が突然私の口を使って言った。

「そうだ！これ、梶さんが北陸に行った時に買ったものだ。どうせどこかの女の人に上げるんだろうって思ってたのに……」

「その石はな、力のある物だったんだ。それで、シャオロンに送った。アイツが結婚する時に祝いとして。でも、アイツ別れたって言ってたよな……。それでいらなくなったんじゃないのか？」

「だからくれたのかしら？」

「まあ、それだけじゃないとは思いますが……」

「幾ら力がある石だとは言え、翡翠って中国の方が有名じゃないですか？なのに、何故梶さんはウォンさんに翡翠なんか贈ったんですか？」正巳が尋ねる。

「俺の名前だよ。俺がアイツにそれを贈ることで、大昔の傷が少しでも癒えれば良いって思ったのさ」

「そうね……。翠玉。それで勾玉だったの……」私は手の中でその翡翠の勾玉を握りしめた。

「梶さんが生きていた時に、ウォンさんにあの大昔の話、したんですか？」

「いや、俺は知ってたけど何も言ってないよ。俺とお前は昔不倫相手だったなんて言えるか？だけど、アイツは初めて会った時から、とても親切だった」

「そうですか、知らなかったんですね。じゃあ、あの時突然思い出したんだ」

「そう言うことだな。だから幾らいつも冷静なアイツでも感情を抑えきれなかったんだろう」

「もしかしてウォンさん、やり直すつもりかも知れませんね」

「ん？」春樹が言った。

「だって、愛していた翠玉、つまり梶さんはもう居ない。そして、残っているのは、憎むべき皇帝だっためぐみさんでしょう？ウォンさんとめぐみさんは、同じ人を愛した『同志』ですよ。今の僕とめぐみさんの関係と同じです。愛し合えないはずがない」

「正巳、あなたなんか大人になってきたわねえ。でも、私、彼のこと好きだけど、恋愛の対象とは思えないわよ。また素敵な仲間が増えたって感じかしら。でも、そんな仲間には囲まれていると、その世界にどっぷり浸かってしまいそうね」

「めぐみさんは嫌ですか？」

「もちろん嫌よ。私は私の仕事をしながら、真っ当に生きるの。そんなやくざな世界なんて絶対嫌」

「めぐみさん……。やくざな世界って……。僕、泣きそうですよ」

「あらあら、傷ついた？まあ、差詰めメモリーの社長のあなたなんてやくざの親分ね。でも、それを仕事に出来てるんだからそれはそれで良いんじゃないの？」

「梶さんがちゃんと仕事にしてくれましたから……」

「アイツってホントずるがしこい奴だったもんね」

「おいおい姉さん。それは無いだろう。そう言う悪口は俺が居ないところで言ってくれ」

「あなたいつ居なくなるの？あなたが居なくなるまで悪口言えないなんて、苦しくて気持ち悪くなっちゃうじゃないの」

「それもそうか……。でも、言い訳じゃないが、俺なりに人のために成りたかったんだぜ。俺が生まれ持ってきた力や、身につけた知識。そんな物を誰かの役に立てたかった。もちろん純粋にそれだけだとは言い切れないがな」

「お金にも成るし、女性にももてるものね」

「まあな。それに、やってる内に本当は誰にも関われないって知ってしまった。結構辛い時期もあったんだぜ」

「そう……。だったら何故続けていたの？」

「それが俺の仕事だったからだよ。それに、その仕事、結構気に入ってた。一時的だとは言え、多少癒されたって言う客もいるし、その後、自分の力で先に進む奴も居るからな。基本的には誰にも関われない。けれど、支え合って生きているのが人なんだよ。俺は、そんな人というものが好きだったんだ。その好きな者達と一緒に生きていた。それが俺にとっての仕事の意味だった」

「梶さん。僕、本当に感謝しています。梶さんのお陰で僕は楽しい仕事を与えて貰いました。そして、愛する人とも出会わせて貰ったし……」

「それは、お前が望んでいたからだよ。だから、お前はそれを引き寄せた。ところで姉さんは、何を望んでいるんだ？」

「私？私は、普通に生きたいの。出来ることなら、死んでしまえば判る事なんて、生きているうちに知りたくなんて無かった。霊のことも、神のこともね。でも、知ってしまったからには、それを知ったままどこかへ進まないといけない。それを知ったまま普通に生きる道を探すわ」

「それは難しいですよ。知らん振りしてやり過ごさないといけないんですから。めぐみさんにそんな事が出来ますか？」正巳が言う。

「そうね。何か方法があるんじゃないかしら？何か見つけないとやってられないわ。私、悪霊を憎むことも、相手の憎しみを怖れることも出来ないのよ。だって、みんな私の一部ですもの。そう言えば、昔龍が『エゴは捨てるものでも押さえるものでもない。広げるものなんだ』って教えてくれたわ。自分という意識がどんどん広がっていけば、そのエゴも広がって行く。相手が自分の一部であれば、自分を愛するように相手も愛せるものね。でも、まだまだ普段の私は、人の悪意を感じると嫌な気分になるわよ。龍の言う真理なんて私には関係ないもの。全身から血の気が引いて、胃のあたりが縮み上がるような感じがする。だけど、何故かあの時、あのアンディの怒りを感じたときには、それも仕方ないと思った。そして、それが強ければ強いほど、安らかな気分になってくる。私、アンディにあのまま殺して貰えるって思ったら、なんだかゾクゾクするほど嬉しかったのよ。あの時彼の殺意は限界点を越えていたもの」

「そうですね。あの時のウォンさんはもの凄い迫力でした。でも、めぐみさんがそれを受け入れてしまったから、彼の怒りのエネルギーは爆発できなかった……」

「シャオロンには悪いことをしたかな？」春樹が言う。

「どういう意味？」私が尋ねる。

「要するに、上り詰めたのに解放できなかった。欲求不満になって無ければいいが・・・」

「あなた・・・」私は少し赤くなる。

「それも、アイツにとって必要なことだったんだよ。俺との問題を終わらせてしまうために、わざわざ来てくれたんだ」

「僕にとっては何か意味があったんでしょうか？」正巳が尋ねる。

「ああ、多分な」春樹が言った。

「だってあなた、とっても大人になったわ。愛についても随分理解したし、もうすぐ私のお仕事も終われそうよ」私が言う。

正巳は黙って首を振ってみせると、配られてきた機内食を食べ始めた。

窓の下には阿蘇山のカルデラが広がっていた。

金木犀の香りに導かれた、愛の物語を楽しんでいただけただけでしょうか？
人と人との間にある「愛」を通して、大きな愛・・・その本質に気づいていただけると幸いです

。

金木犀を敷き詰めて・・・

<http://p.booklog.jp/book/78409>

著者：naomi

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/nekokiri/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/78409>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/78409>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ